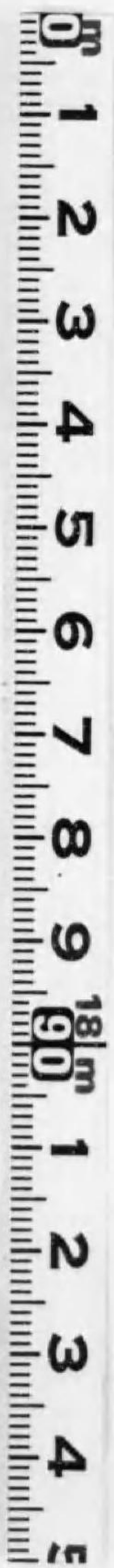


真理  
綜合  
精神療法傳授書

特 112

492



始





特112  
492

丸田智昭講述

整理  
綜合

精神療法傳授書

帝國精神學院發行

大正

6. 10. 16

内交



## 凡 例

曩に精神治療研究會の名の基に本書を發行せし處、幸に社會各階級の士入會せられ初版は既に頒布し盡せるを以て、更に本傳授書を再版することゝなれり。

此時に當り本會の發展につれて内容の組織を改革し、名稱を改めて帝國精神學院となす。

此機會を以て再版傳授書の内容に大刷新を加へ、殆んど完璧に近からしむ。



本傳授書は本院に來り直接教授を受け難き事情ある入門者の爲に編述せり。  
 故に本書に對しては永久絶體の責任を有し、萬一不明の點あらば喜んで質疑に應答すべし。

大正六年の初秋改版成るに及び

本院樓上に於て

丸田智昭識す

眞理綜合精神療法傳授書

□ 項 目 □

第一章 仙術

第一節 心身修養としての仙術……………一頁  
 ○修養法の撰擇……………○老婆心……………○仙術とは何ぞや

第二節 仙人の例證……………三頁  
 ○奇蹟行爲の一般……………○現代に於ける慕仙人……………○熱湯療法……………○仙人何者ぞ

第三節 神秘の説明……………五頁  
 ○精神的威力と實證……………○仙術の再現……………○眞理は學理に抗抵せず  
 ○自然的修養

第四節 仙家修養法の極意……………七頁  
 ○修養の極致と分類……………○素食法……………○導引法……………○灌水法  
 ○觀念法……………○吐納法

第二章 催眠術

第一節 催眠術の原理……………十四頁



### 第三章 感應術

○催眠術の定義……○催眠状態……○状態の分類……○歐米の催眠法……  
○催眠の現象

**第二節 催眠術には暗示が主要**……………二十七頁  
○暗示の定義……○暗示の働……○暗示の順序

**第三節 進歩せる催眠法**……………三十一頁  
○方式……○方法の區別

**第四節 催眠の覺醒法**……………三十三頁  
○方式と區別……○覺醒の要點

**第五節 動物強制術**……………三十五頁  
○動物強制術の歴史……○捕心術……○動物強制術の實驗法

**第一節 感應術の原理**……………三十八頁  
○念動念波の作用……○心性の働

**第二節 感應の學術的觀察**……………四十頁  
○神秘家の説……○心理、哲學の概説

**第三節 氣合術**……………四十四頁  
○氣合の眞理……○氣合術の應用……○氣合術の修養法

### 第四章 精神眞理綜合論

**第四節 降神術**……………四十六頁  
○降神は感應作用……○歐米の降神術……○降神の例證

**第五節 特種の感應術**……………四十九頁  
○無生物の感應……○眞言と九字護身法

**第六節 感應療法**……………五十一頁  
○治療の原理……○療法の應用

**第七節 災害豫知法**……………五十三頁  
○客の來賓を知る法知人某婦の實驗……○感通に由る天候豫測法……  
○途中遭難の豫知法……○火災の豫知法……○一切の災害豫知法(三脈術)

**第一節 唯物、唯心を論ず**……………五十六頁  
○二者の争闘……○唯心論の勝利……○唯心と療病

**第二節 心靈界の自然法**……………五十八頁  
○進化と退化

**第三節 觀念の働**……………六十一頁  
○進化論の一例……○自然療能

**第四節 醫術と精神療法**……………六十三頁



○醫學の見解……○肉體の働き……○道理の無視  
**第五節 人體概論**……………六十五頁

○人體の構成……○細胞の働き  
**第六節 精神眞理本院治療法**……………六十七頁

○施術の順序……○方式……○秘傳……○効果  
**第七節 遠隔療法**……………七十頁

○遠隔療法の行はれる理由……○方式……○結論

**第五章 臨床應用編**……………七十四頁

○神經衰弱症……○比斯的里……○脚氣……○胃加答兒……○腦貧血……

○神經痛……○神經麻痺……○神經性心悸亢進……○腸加答兒……○癱瘓

質斯……○痔疾……○癩癩……○遺尿症……○喘息……○齒痛……○半身

不隨……○肺結核……○吃語……○飲酒……○喫煙癖……○結論

**眞理綜合精神療法傳授書**

**第一章 仙術**

**第一節 心身修養としての仙術**

古今心身修養としての著書及び之れが稱導者尠ならず、曰く食養生、曰く  
靜座呼吸法、曰く抵抗法、曰く斷食修養、曰く日光浴、曰く座禪等殆んど無數  
に涉り從て世人たる者之れが取捨撰擇に困むの有様である、而して以上の方法  
なるものは、現代の消極的なる醫術衛生法なるものに較ふれば何れも或る特徴  
は認め得ることが出来るけれども、未だ以て完全と云ふ境には達して居らぬ、  
茲に於て自分は多年實驗の結果仙術なるものを諸君の前に呈供せんとする所以  
である。

元來精神的療法を學ばんとする者は、先づ自己の心身をして健全を圖ること



が、先決問題であつて、人格、技術、熱心等は進んで他人に手を下すに及んで必要たる條件となる譯である、諺に衣食足つて禮節を重んずるは世間一般に云ふことである如く精神治療家たらんとする者も須へからく、自己の心身を健全にして始めて其實を擧ぐるここが出来る者である、然るに従來多くの世人は唯其方法のみを研究し恰も一種の娛樂に資せんとするが如き傾きあるは一面斯道の眞意を没却するのみならず、引ては斯界の發達をも妨ぐるに到るもので甚だ遺憾の次第である。

本院に入門された諸君は充分茲に留意して他人を施術せんとするに先だち、自己心身の修養を充分にし假初にも輕舉妄動の所爲に出でられざる様、吳々も婆心を與ふる次第である。

次に起る問題は仙術とは何ぞやと云ふことであるが、古來から修し來つた仙術なるものは仙家獨特の秘法として世に公けにせず、従つて之れを修せんとする者も、先づ普通人間界一切の情慾を去り即ち人類社會の境遇を脱して只管、山林幽谷の如き所謂神仙の地とも云ふべき處に獨栖し、長年月に渡る心身修練

の苦行を遂げ、其進むに従つて或は奇蹟的行爲をも演じ得られ、萬人等しく希望する處の不老不死の境涯に解脱したもので、「廣博志」に曰く此仙人なるものには、九天眞天、三大眞王、太上眞人、飛天眞人、飛仙、僊人の七級あることを記してある。又釋名と云ふ書に「老而不死曰仙、仙入山故其字人傍山也」とあり、又書言故事に「神仙化去曰尸解足不青皮不皺目光不毀不失其形骨者皆尸解也」とある、是を以て見るも如何に其修養の極に達せしもの、世人に異なれるかを想像することが出来る。

## 第二節 仙人の例證

古來仙人が行ひ來つたと傳へらるゝ奇蹟なるものも又實に非常なるもので、例へば酒を喫て火を救ひ、雪を削りて銀となす、白石を叱して羊となす、或は尺地の法と稱して地脉を縮めて、千里の遠きを尺となせしなど到底理法を以て解決出來ざる諸種の方術を演じ、此他多くの仙人は雲に乗りて大空を翔けたるか、或は龍に乗りて飛行した等もある、又單に是等の傳説のみに止まらず我國



史にも天平の頃大和國生駒山の頂より龍に乗つた仙人が青油笠をかぶつて飛行したる記事あり、支那に於ても葛洪及び劉向などは頻りに此仙術を唱道したと云ふことは歴史の證明する處である。今是等の所謂カビの生へたる例を一々詳述するは到底繁雜に堪へられず又本問題の主眼でないから是位に止めてをいて今一つ諸君の参考迄に例を現代に求めんか、宮城縣の片田源七事(藝仙人)は數年前より帝國大學に於ける實驗を初め其他各地に於て公衆の面前に諸種の奇法を演じ、一般の心膽を寒むからしめ一時世論を沸騰せしめたるは諸君の記憶に存することであらう。

彼の源七翁が、炎々たる烈火の中に足を投じて少しの火傷を爲さず、夏尙寒き三尺の双先を握り振り廻して傷付かざる、沸騰せる熱湯に手を入れ之れにて顔を洗ひ平氣なる、鋭利なる刀劍を梯子に組み素足にて昇降し、大梵鐘を頭に撞き鳴らす等幾多の人士が見聞した事實である。

次に余は同氏に面談を求めたる際、彼れは平素熱湯に差入れたる手を患部に當て常に疾病の治療をなしつゝあるを談る、而して前記の出演中に於て偶々傷

つくることあるも皆此療法にて全治し、是に依りて他人の疾病をも治療なしつゝありと。又他にも熱湯療法にて之れに類似せる治療をなす者あるを聞けり。

そも是等の神秘的にして所謂非科學的とも云ふべき行爲をなすものそも何者ぞ、やはり吾人と何等異ならざる人間にあらずや、されば吾人たるものも其修養に務め心身の鍛錬を重ねなば精神一到何事か成らざるの理あらんや。

### 第三節 神秘の説明

獨り人類のみに止まらずそれと動物により一種の不可思議なる力を現はすことあるは、諸君も既に熟知して居られることであらう、今是等の變體心理作用とも云ふべき現象を物質に例へて説明して見よう、彼の蒸氣機關に石炭を燃焼して動力の働を起す同一の理由であつて、精神の偉大な感應作用の働は此動力と同じく形を變へて顯るゝのである、併し精神作用は肉眼で見える事が出来ぬから或は働の有無を疑ふ者も有るかも知れぬが、それは愚の極と云はねばならぬ、例へば暗夜に鳥が鳴いたと假定して姿は見へぬが鳥がいる事は事實であ



ろう、又暗夜梅林を通行せんか梅花紛々として鼻を襲ふ事ある場合其梅花の無しと云ふ事は云はれぬであろう、肉眼に見へぬ精神も斯の如くである、要するに其修養の完きに至れば精神威力を發揚する難事ではないのである。

仙術の修養は古昔は専ら仙家獨特の秘法として唯一部有識者の修養して行つたものであつて、普通一般に摸倣し難しとして更に研究し見んご企てた者も無かつたが近代に至りて文化の發達と共に悉く凡ての者を科學的説明を加へる時代に相遇したものであるから、幾多の研究者が出て、其効果を唱導し、従つて社會よりも注目を引く様になつたのである、其社會に唱導せらるゝ重なる者は呼吸法あり、食餌法あり、其他雑多の名稱を附する健康法として實現せらるゝも其源は皆此仙術より發したるものである。

仙術の學理的説明の可否に就ては種々の議論もあるが要するに仙術とは吾人が常に主張して居る自然の道を行ふべき無爲の教である事を知らねばならぬ、元來其根本を道教に發して居るのであつて、簡單に其要領を述べれば「中庸にも天の命を性と謂ひ、性に率ふを道と謂ひ道を修むるを教と謂ふ」と有り、此

天の命とは即ち神の意に従ひ天地自然の方則に立還り以て其道を修むるを謂ふのである、現代は醫術長足の進歩に反比例して一般人身體質の虚弱に傾けるを見て、其源に遡て質せば所謂自然の方則に反するが爲である、即ち此自然の道たるや坦々として砥の如くであつて人爲的の學理に抗抵するが如きは眞の修法ではないのである。

宗教家の説く慈悲心又は愛性等にもあらず、教育家の教ゆる體育、智育、徳育にもあらず、要は原始的自然に立還るの教であつて一舉一動此道に叶へば天稟の心身をして強健ならしめ、疾患ならば治し性癖あらば矯め得られ、進んで人格の向上、天命の全ふを遂げ得るのである、自然は單純なり仙術の修養の價値も偉大と謂はなければならぬ。

#### 第四節 仙家修養法の極意

無病長壽の秘訣として傳へられつゝある、仙家の修法なるものは左の五項を以て組織せられてある。而して其何れも現代に於て轉化し修しつゝあるものに



て、唯に一部のみを實行經續するもよく健康を保ちつゝあるの事實に徴するも如何に偉大の効果あるかは、蓋し思ひ半ばに過ぐるここが出来、尙其方法の簡易なるに於てをや、要するに仙家の極意と稱するもの即ち心身修養法を主眼とせしものにて前述の奇蹟行爲等は此修養と相待て自然に感得するに到るものである。

仙家に傳はる五ヶ條の極意とは何を指すか其一を素食法と云ひ、先づ食物の消化よきを選びて胃腸の健全を圖り、従つて一切の飲食物より生ずる病原を根本的に除かんさせしもの。第二を導引法と云ひ、全身の血液をして澁滯せしめず引ては細胞の動きを旺盛ならしむべく案出せしものにて今日のマツサージは之の進歩せしものである。第三を灌水法と云ひ、現代神經衰弱者等に勸むる冷水摩擦は之である。第四を觀念法と云ひ、精神を自在に動かして神經的に生ずる一切の障害を採去るべき方法にて、今日の自己催眠又は内觀法等はこの理を應用したものである。第五を吐納法と名づく、現今専ら流行しつゝある靜座呼吸法であつて、仙家の修法に到りては以下順を追て詳述することとする。

第一素食法、古人曰く「飲食の人は人之を賤しむ其小を養ひ大を忘るゝ故」ごあり、然るに現代多くの世人は此食餌法に就て誠に誤れる定義を下して居る者がある、それは只に牛乳、鶏卵等の如き最も消化し安く且つ肉類等其分析表のみに標準として其滋養分のみを重きを措けるものもあるも、直に之を賛成することはお出来ぬ、而して其必要なる要件の第一は食膳に向ふの時期であつて、此時期を誤らば如何なる滋養物でも却て有害なる結果を來すことが往々ある、然して最も適當なる時機とは一定の時間を経て眞に空腹を感じたる後に食するを最良の方法である、由來我日本人は此至重なる飲食物に就き誠に放縱なる習慣があり、之れが爲め多少は悉く胃腸の氣分を有して居る、平常普通に一寸空腹を感じたる時の如きは眞の食慾にあらずしてこは一種の習慣又は病的食慾なりとも云ふべきであつて、今何人にも痛切に感じらる標準を示したならば、俗に酸い物を見て口に唾液を貯る如く食慾と同時に唾液の分泌が盛んになる事、此唾液中には最も巧妙なる天然の消化劑を有す即ちヂャスターゼが多量に含まれてあり此時食物を攝取したならば、口中にて充分にヂャスターゼを混和し同時に



腹中に入りて胃腸壁よりは又盛んに消化液を分泌して完全に消化作用をなすことが出来る、従つて悉く全身の滋養となり營養となり次第である、之に反する時は如何に滋養に富める珍味と雖も消化不充分となり之が爲め胃中に於て醗酵作用を起して腐敗し、血液を溷濁ならしめ以て疾病の原因となることがある。

次は食物の種類である、此種類たるや千種萬類にて従て之れが取捨撰擇も至難なるが如きもそは一定の人身に及ぼす方則を辨へざる爲にて、吾人の體質たる其顔面の異なるが如く千態萬様素質を異にして居る以上之れに供ふ滋養成分も又異なる次第である、而して其各自嗜好せる食物は其體質の不足せる成分を要求せる自然の理法とも云ふべく、例せば夏の酷暑に際し發汗多量にして水分の不足甚しきは時は萬人語らずして飲料水の嗜好要求を來すべく要は食物の種類及び科學的分拆による滋養の如何にあるにあらずして、自己の嗜好に適する者こそ、取りも直さず各自の滋養補足となる事を忘れてはならぬ、然し乍ら例へ嗜好品たりとて節食は勿論必要である、今種別の撰擇上之れを述べんか余は肉食より寧ろ植物性を以て勝れる者なりと斷言す、總て菜食は血液を清鮮にし洩

泄機能を調ふるの特効を有し、之れに反して肉類は一時的の活動には富むも概して耐久力乏しく亦血液も不潔ならしめ諸種の弊害を生ず、古昔の仙人なる者蔬菜や果實類のみを食して、能く百幾年の長壽を保ちし事實に徴するも穀類蔬菜の淡泊なるものを選び食するの必要あるを認むる事が出来る。

第二導引法、導引の法は先づ盤座して左右の掌を互に摩擦し、熱の出るのを待つて、「最初左の掌にて左の眼の上を目がしらより目じりまで撫で、次に右の掌にて左同様に撫で左右各三度なすこと」次に左右の掌を開き、兩の中指を突き揃へて鼻を上より下へ撫で下すこと三度」次に左右の掌にて顔の全面を上より下へ撫で下すこと三度」次に兩耳の輪を指にて挟み撫で下すこと三度」次に兩手にて唇の上より齒を叩くこと五十度ばかり但し上下共齒グキまで、仔細に叩くこと、是れは口熱を去り齒を堅固にするを得」次に兩掌にて耳を塞ぎながら、指頭にて耳上の頭部を叩くこと五六十度」次に兩中指を兩耳に入れて塞ぎ兩方に開くこと」次に左右前額及び頭顱の周圍を仔細に叩くこと」以上は何れも頭部にて次は腹部に移り、「右の掌にて左の乳を中心に順次に大輪に撫で廻す



ここ三十回、左の掌にて右をなすこと同様」次に右の掌にて臍を中心に撫で廻らすこと三十回又左の掌にて同様」次に兩手にて同時に胸腹の全部に渡り、撫擦すること數十回」次に兩手にて胸より腹部にかけて左右交るく、撫で下すこと三度にて止む」以下兩手及兩足を各上より指先まで仔細に撫で下すべし最も兩脚の際は向ふへ伸へ出すこと。

第三灌水法、之れは裸體となり、清水に手拭を浸しシツクの滴らぬ程度に絞り、顔面より兩手足の先まで摩擦するもので、殊に清水の中へ鹽を少し入るれば、最も効果があるものである。

第四觀念法、凡て修養の道は難きに似て易く、安きに似て難きもので、要は只信念の厚薄と信疑の如何に依るものである、されば佛法にては自己の心靈を尋ぬるを座禪と云ひ神道、儒道にては是を安座又は靜座と稱へて居る、而して其形式方法に於ては異なる處があるも日常の行住坐臥、喫茶、喫飯、執務、歩行を問はず氣海丹田に想を練るのである、今佛語を藉りて云ふたならば、如何なるか是心身、如何なるか、是本來の面目と間斷なく心源に向ふので斯の如く相

見し、其極致に達したならば眼を閉ち想を凝らすと同時に心身の疲勞を恢復し、煩悶を去り、意思を強固にする等其轉化せる修練はよく疾病を消滅せしむる事も又容易なる譯で、之を名づけて觀念法と云ふのである。

第五吐納法、此吐納法とは現今稱る處の所謂呼吸法の事にて、仙家には一種特別の座法あるも、先づ普通の場合には座布團の上に正身端座し、身體を柔かく持し下腹に力を入れること、次に呼吸に移る、呼吸の如何は吾人の心身上一大關係があり、常に吾人の身體を保持し精神を支配する上に非常なる影響を及ぼすもので古來より有名なる「白隱禪師」の著書夜船閑話や現代に於ても二木博士始め其他の數士は此呼吸法のみを以て修養をさへ説き居る程なれば推して知るべく、今簡單に之が方法を述べれば第一腹部(臍下)へ深く空氣を吸ひ入れ除々に呼き出す、通常一分間に十五六回呼吸し順次其數を減じ十回とし五回となり遂には一分間に一回位迄進んで修練せねばならぬ、此の呼吸は生理學上より見るも人體の組織に大關係のあるもので又腦髓の動靜にも諸種の結果を及ぼすものなれば、唯正座して修養するのみならず常に下腹部の充實を心がくべく數



息をなし或は其他適宜の方法を制定する事が肝心である。

## 第二章 催眠術

### 第一節 催眠術の原理

催眠術の眞想を知らぬ者は、催眠術を文字通りに解して、人を有意的に眠らしむる方法と誤解せる者が多い、殊に或る術者又は著書などに於ても斯様に定義して居る、是等は催眠術の性質を一般に迷誤せしむる恐れがある。

抑も此催眠術と云ふ文字が元來當を得ないので、決して眠らすと云ふべき意味でなく、其状態が一見通常の睡眠に似たる處があるより斯の用語が起つた所以である。

催眠術の性質は元々生理上の交渉ではなく心理上の法則を應用するものであつて、即ち術者の誘導により、被術者の心が無念無想となり、自發的の反對精神の活動が全く消滅し、唯術者が與ふる暗示通りの觀念を起し、而して其觀念

は單に精神上のみでなく、肉體にも種々の變化影響を及ぼすのである、そして其効果は覺醒後に殘續し、所謂治病、又は性癖矯正等の實を擧ぐるに至ると云ふのが催眠術の眞想である。

催眠状態は心理作用が主で、通常の睡眠状態は生理作用を主とする、此の如く判別することを得るのである。

然るに東西學者中にも往々にして、此兩者を混同して居るものがある。

ナンシー派のベルンハイムの如き「睡眠と催眠との間に區別がない」と謂ひ之に反してプレートは「著しき相違あり」と稱して居る、又リエポードは睡眠は吾人が眠ると云ふ觀念の上に注意を集合する結果より起ると云ふ説に反對してハーシュは「小兒の眠り易いと云ふは唯小兒が注意を集合しないからである」と同時に眠ると云ふ觀念を更に持たないからである」と云ふて居る。

余は今通常睡眠と催眠との區別を左に掲げて参考に資することとする。

**睡眠**

主たる原因は生理作用に基くものであつて多少の精神作用を要することし、  
疲勞物質の刺戟に依りて起るものなるを以て暗示に感應せず



催眠

主として精神作用なるを以て術者の精神と被術者の精神との交渉あること、疲勞物質の刺戟なくして起り殊に良く暗示に感應す

右の如き主因に依り區別することを得るのである、要するに催眠状態と云ふは自發的觀念の活動なく無念無想の状態であつて暗示に宜く感應する心身の状態を指すのである、被術者の異なるに従ふて其状態の異なるのは術者の屢々實驗する所である、即ち百人百様とも云ふべき現象あり、或る者は深き催眠状態を呈するもある、或者は僅に睡氣を催せり云ふ状態に過ぎざる等、其状態の種類多く判然たる區別の立たぬに苦しむのである、今有力なる學者は如何様に此状態を分類したか今其一二を説述せん。

ブレードの三部類 浅い催眠状態——此状態は幾分昏睡病状を呈するも、催眠状態中の事柄を能く自覺せるものである、治療暗示に感應する患者の百分中九十迄は此状態である。

深い催眠状態——此状態は催眠状態中の出来事を少しも記憶せず復思ひ起す事も出来ない、されど再び催眠状態を惹起するときは此忘却せる記憶が壯んに

意識界に活動するのである、ブレードは此状態を名づけて二重人格と云ひ更に細分して

「敏捷状態」催眠中に鼾聲を發し然も其感覺作用が頗る鋭敏な状態である、「深状態」一般感覺を失ふ状態である。

催眠的昏睡——此状態は最も深き催眠状態にて、覺醒後其状態中の出来事を記憶せざるのみでなく、再度の催眠状態にあるも忘却せる觀念が再起せないものである。

ブレードは又多くの中間状態ありて不識々々互に相變化する者と信ずと謂ふて居る。

シヤコーの三分階級 同氏は深き状態についてののみ區別したるものにて、浅き催眠には此状態を見ることを得ないのである。

止動病的状態——著しき特質は筋硬直を呈し不動の姿勢を取り、眼は開きたる儘閉づることなく、眼睛一定して轉動せず、涙は積滯して溢出し、呼吸は沈靜するに至る、然れども手又は足を高く擧げ、或は曲ぐるも何時迄も其儘にし



て與へられたる位置を保持する硬直状態である。

ヒステリー患者等に對して不意に強度の光線或は音響を以て刺戟すれば惹起するも、此實驗は生理上に危害を伴ふことがあり、要するに此状態にありては反射運動起らず、筋肉神経は刺戟により短縮せず、皮膚は知覺を失して疼痛の感が起らず、感覺聽覺は猶幾らかの活動を維持するによりて暗示の影響を受けて種々の現象を生ずることが出来る、此状態を止むるには覺醒せしむるか、眼瞼を閉ぢさせ或は光線を柔ぐの手段により昏睡病的状態に變ずることを得るのである。

昏睡病的状態——此状態は深き極睡眠によりたる如く身體は力なく、眼は多く閉ぢ、頭は多く仰向きて腕は垂る、若し之を托ぐる事あるも直ぐ垂下する等、大概は其知覺を失ふ此状態を惹起せしむるには物體を凝視せしむるか、瞼の上から眼球を壓するか、或は暗示により、又は止動病的状態より移すことによりて生ずる、此状態に在るもの眼を開けば止動病的状態に轉ずることが出来る。

睡遊状態——之は興味ある試験的現象の表はるゝものにて、特性は皮膚又は

粘液膜を刺戟しても更に疼痛の感を起さざる者が多い、中には反對に著しく鋭敏なるもあり他の感官及記憶等は不同である。

睡遊状態には自動的と他働的との二種あるを見る、他働的の者は其眼を閉ぢて更に自動的に動作をなし又問を發せば低聲にて答ふ、其位置人物等について意識を有し、又己れに對して話しせらるゝ言語を能く聞分くることを得る。

自動的睡遊者にありては自ら能く動作し四方山の談話をなす等、對手の何人たるを顧慮せざるものである。

多くの睡遊者は唯過度の心的激働を見るの外通常状態と殆んど同じく精神的活動は著しく鋭敏となり、情緒昂進せるを以て之を笑し、泣し、怒し、悲ます等極めて容易で、彼の神通力を行ふことを得るも此状態である、其他幻覺錯覺を起さす等術者の命令通りに出來得、手を以て頭部を壓すか或は口にて睡遊者を吹く時は一種奇異なる心理的關係即ちラツポート(意志の聯合)が兩者の間に生じて來る、若し施術者が其室を去る時は被術者は不安の様を示し間々術者の行く處に隨ひ行き其傍ならざれば休息せざるもあり、傍人が被術者に干涉する



時は苦痛を惹起する事もあり、施術者の言語のみを聞き他の者が大聲を發するも平然として居る、又「明日何時に睡る」と暗示を與へて置けば術者が前に居ざるも、其時間に催眠状態に入るものである。

今以上に述べた二種の状態は、規則正しく必然的に凡ての被術者にも見る事は出来ぬ、そして中間の状態が混合的に現はるゝ場合もある、然して此睡遊状態を惹起するには或る物體を注視せしむるか、又頭蓋を軽く壓し若しくは摩擦して昏睡状態又は止動病的状態より轉ぜしむることを得るのである、通常は暗示を用ひて誘導し時としては自發的に生ずることもある。

メスマルの方法——被術者の身體を摩擦して電氣をかけること云ふ仕掛けが主眼であつて、先づ室内の構造を巧妙にし其室に入るに心中摩訶不思議の感に打たる様な装置である、特に有名なるは「バケト」の方式で、次は「パツス」法を用ひしことである。

「バケト」の方式——是は三十人内外の患者を同時に感應せしむる方法で、硝子又は鐵の粉末を散布せる器具中に多くの瓶を二組に分ちて並べ、一組を中央

に集め他の一組は反對に外の方に向はしめ、而して其器具に水を十分に入れ蓋に數多の穴を穿ち其穴より多くの鐵條を以て貫き外部に出で居る鐵條を握らすので之を「バケト」と云ふので、被術者は器具の周圍に二列若くは數列に並び互に膝を交ふる位に相密接し鐵條を握る、此時メスマルは元來音樂に妙を得て居たから洋琴の如きものを別室にて弾き人心を恍惚たしらめ被術者は暫時にて一種異様の感覺を生ずるを待ちメスマルは鐵棒を以て別室より出で來り患者を軽く打ち廻るに何れもロステラー病者の様に號泣哄笑し或は躍る等、其光景は名狀し難かつたこと云ふ。

「パツス」法——「パツス」は術者が被術者の上に手を運び動かすを云ふのである、メスマルは兩手を被術者の双肩に置き、それより指の先まで撫で下げ兩の拇指を一分間計り握る之を二三回反復して被術者の體軀中疾患の箇所を神經の方向に沿ふ様にして指を觸れる、斯の如く接觸して施術を行ひたるも後世の術者は接觸せずしてパツス法を行ふに到つた。

ブレードの方法——最初催眠術の實驗に用ひた方法は或る光輝ある物體を把



りて之を左手に持ち被術者の目から凡そ一呎離れ且つ前額の上部に之を視て疲勞を感じる位の位置に支へ、一心に視詰めしめ同時に雜念を起すなかれと告げ、右手を以て無名指と中指とを擴げて、其物體より被術者の眼の方に近づければ大概眼瞼が自然に閉づる、然れ共一度で閉ぢざれば數回反復し「もう一回指をあなたの眼の方に近づけると眼が閉ぢずに居られなくなります、然し眼球を動かさずにその儘物體を見詰めて居らねばなりません」云々と言ひしが後年に至り同氏は物體を注視せしむる事は被術者の眼を疲勞せしめ、又幾分雜念を惹起するを認め此方法を一變して注視を廢し、初めより被術者に眼を閉ぢさせる様に至つた、此結果は以前よりも容易に催眠状態を惹起せしめ従て不快の徴候を絶つ事を得たりと云ふことである。

彼は又盲目者に催眠術を施して好果を擧げてより、遂に物理的方法を放棄した、之の状態の惹起は視神經に因つて起るのでなく、心意的作用より生ずるを確めたるものにて、其後再三催眠術を施し被術者が容易に催眠状態を惹起するのは、習慣と觀念の適合想像等に依るこの經驗を経、従つて晩年には明確に斷

言して曰く

「言語の暗示は直接に催眠状態の惹起又は現象の喚起に尤も良き方法なり」と同時に物理的方法は單に間接の暗示に過ぎずとしたのである。

ナンシー派の方法——之は被術者を椅子に倚らしめ「何事も思ひ起す事なく唯餘念なく術者の面を視詰めよ」と告ぐるので、被術者が目の疲勞を招くまで注視せしむるを要せざりし、唯被術者の注意を一點に集むる爲めの形式に止めしもので、若し目が自然に閉ぢざる時に閉目せよと命じ「あなたの眼瞼が重くなつて來ました、手足が痲痺して來ました、漸々懶くなつて來て睡氣を次第に催します」等の言語暗示を與へたのである。

次に催眠中に於ける生理的現象に就て述べてみやう。

隨意筋に及ぼす影響——催眠状態を起しつゝある時「あなたの手が動かなくなつた」と術者が一言云へば被術者は之を動かさんといふ意志が起らぬ、よしんば動さんとする意志があつても全く動かすことが出來ぬ、之と反對に動かぬ手を動かす事も出來る譯である、其他足を動かさず眼を閉ぢさす等此理によりて



生ずるので腰の曲りを直し、或は半身不隨等の疾病を治療する事の出来るのは皆此理由である。

不隨意筋に及ぼす影響——腸の蠕動運動を變化せしめて便通を左右したり、心臟の鼓動又は呼吸作用をも或程度迄は左右する事を得る、例へば脈膊を百度以上に上らすも六十以下に下らす事をも成し得るのである。

普通感覺に及ぼす影響——普通感覺は自己より生ずる感覺で疲勞、空腹、口渴、頭痛、腹痛の如き身體に於ける工合を知らしむ者なるが、之又自由に左右する事を得るのである、例へば食事を濟せる計りの人に向ひ非常に空腹になつた云へば眞に空腹を感じ、又反對に空腹の人に満腹になつた云へば其通りの感じを起す、食慾缺乏の者に向つて食慾を増進せしむる事も此理に依りて出来る、其他口渴を覺へしめば渴に絶へず湯水を要求する等、頭痛も齒痛も此理によりて同様に自由に治療する事が出来る。

特殊感覺に及ぼす影響——特殊感覺は五官の感覺を云ふので即ち視覺、聽覺、嗅覺、味覺、觸覺等にして鋭敏になす事も又遲鈍にする事も出来る、其鋭

敏となりたる場合には到底通常の状態にて識別し能はざるを識別する事を得るのである。

例へば催眠状態にある者に室内等を歩行せしめたる場合一々其障害物を避けて巧に歩行する等は觸覺の鋭敏になつた爲で、視覺も亦其如く厚紙等の不透明なる物を透して物を見、聽覺も十四倍迄の鋭敏になるブレードは云つて居る、嗅覺も亦其通りでブレードは四十呎の距離から薔薇の香を嗅き分けさせた云つて居る、之に反して凡ての感覺を遲鈍ならしむる事の出来得るのも勿論である。

分泌作用に及ぼす影響——唾液とか乳汁とかの分泌作用が精神作用によりて影響を受くるのは普通の状態に於ても經驗する事實である、即ち酸いこの觀念が起る時は唾液の分泌を生ずる如く況んや催眠状態中に在りては易々たる事論を俟ずである、本來乳汁の無い人に分泌せしむる事は出来ざるも精神上の刺戟を蒙りて出ざる場合等は分泌を促す事を得るのである、此他涙液、胃液、發汗、尿水等をも此理によりて其分泌作用を自在ならしめ殊に少年時代に多き尿の分



泌繁多なるを減じ、又促すことも随意に出来るものである。

次に心理的現象についても、恰も食欲を増減せしむるが如く、淫慾、金錢上の慾望、名譽上の慾望等を加減し調節せしむることを得。

其他感情に及ぼす影響——即ち愛情、憂鬱、憤怒、恐怖等の感情は此催眠術によつて容易に左右することが出来る、例へば無情冷血の人を變じてよく同情熱血の人となさしめ得る等其一例である。

靈的現象 宗教にて謂ふ神通力と稱するところが催眠術に於て見ることが出来る、前述の生理的現象及び心理的現象は生理學、心理學の科學的説明を加ふることを得るも、此靈的現象に至つては説明に苦むものにて、或は靈魂が肉體を離れて宇宙を飛ぶと説き、或は感覺が鋭敏になること云ひ諸説紛々として定義がない、然れ共其現象に到りては催眠状態中に能く數百里外の事情を透察し之を語るに、實際目睹したるが如く其事實を誤らざるのである。さり乍ら斯の如きは一般被術者の誰にも出来る者にあらずして、其他凡ての現象は甲乙同一に現はるゝものに限らず、人に依りて其趣きを異にするものなることを記憶せなければならぬ。

## 第二節 催眠術には暗示が主要

暗示は催眠術上重要なもので、俗に催眠術を暗示術なりと稱へて居る者もある、之は英語の「サツゼツション」を譯したるものにて元々羅典語の「サグチエン」即ち歸伏せしむる、又は告げ知らす等の義より出でたる語なるも、語原の外に他の意義をも有するやうになつて且つ廣狹多様の義を含んで居る「ボルドウヰン」氏は曰く「暗示とは外部より不意に意識内に侵入することに依りて生じたる現象の一群即ち思想潮流の一部を爲す所の觀念又は影象の一群に名づく」又「シーデイス」氏は曰く「暗示とは其人の多少反抗あるにも係はらず或觀念の精神中に亂入するものを謂ひ、其觀念は強烈の勢を以て其人の精神を支配し、且顧慮なく殆んど自動的に實現せらるゝものなり」又、然れ共余は左の如く定義するを當を得たるものと信するのである、暗示とは吾人の精神に觀念を波及する一の刺戟にして、其觀念は同系統の觀念を誘起して精神及び肉體に或



る影響を及ぼすもの。

抑も吾人の精神は無数の観念を有するも、一瞬間に於て吾々の心意に表はるゝ観念は僅少で其大部分は、何處にか潜みて適當の機會を得る毎に表現せんとして居る、而して其表に現れたる状態は所謂精神活動の現象にして観念の聯合と稱する一種の關係に依りて行れて居る、観念の聯合とは一種の關係に依りて行はる即ち二個以上の観念が互に或る關係によりて聯關して郡若しくは列をなし系統を作るを云ふので、従つて之と聯合せる他の観念も喚起せらるゝものである、暗示は實に此観念を自由に生ぜしむる勢力を有し、精神観念を惹起するに強烈なる刺戟と云ふべきである。

而して茲に特に注意を要するとは、凡て何事にも自ら一定の順序を有するもので苟も此順序を追ふて進まなければ成功し難いことである、例へば山に登るにも其麓より一步步順次に上りて絶頂に達するここを得ると同じく、催眠術に於ても術者が被術者に向つて與ふる暗示も順序を踏まなければならぬ、若し術者が何等の考へもなく漫然たる暗示を與ふるときは被術者は少しも其れに感

應せざる許りか稍々もすれば滑稽に陥る事さへなしと云へぬ、然らば暗示は如何なる順序に與ふべきかと云ふに、先づ被術者の納得し易きもの即ち被術者の考へに最もよく投合したるものより漸次進めて行き、必ずよく被術者の外貌に表れ来る微候を捕へ、其機に乗じて之に伴ふ暗示を與ふべきものにて、決して藪から棒的に突然始めから幻覺を起さんとする様な暗示を與へてはならぬ、元々暗示催眠状態の深くなるに伴ふて進めて行き、其進むる一步步々成功し催眠状態の深度を増すものと知らねばならぬ、例へば「ソノ通り目を開くのが壓になつて來た」云々と暗示を施せば被術者は其微候を自覺すると同時に自分の身體は自己の隨意にならないと云ふ感想を起すに至るもので、其機に乗じ「あなたの腕はもう動かない」又「手が膝に着いて離れない」云々と云へば前の理と同じく忽ち感應する、之即ち暗示成功の第一歩で次に暗示により一切の有意運動を支配し之れが成功すれば、外感知覺に關する暗示を與へて幻覺錯覺を惹起さすことを得、此實驗に成功すれば被術者に如何なる事を命ずるも自在に感應し實現する事を得るのである。



暗示投與の注意——暗示は積極的にして且つ斷定的でなければならぬ例へば寢小便を禁じ様とするとき「止めよ」と命ずるにあらずして「もう寢小便はせぬ」と斷定せなければならぬ、此場合は説論的なるは効果がない、何故なれば説論は智識に訴ふなるを以て理性の判斷を経た後ならざれば意志となりて活動せぬ、故に積極的に斷言する必要がある。

暗示は被術者の理想に悖るべからずである即ち、被術者の宗教心、道德心等に反したる場合には反對の精神觀念起りて暗示に反抗し従て其効も奏せざる事あるを以て、術者は之等の事情を察知して之に投合する様暗示を與へなければならぬ。

又暗示は被術者の智識の程度に應ぜざる時は効果を奏せぬ、例へば催眠状態にある者に向ひ音楽が聞ゆると暗示を與へても聞へぬと云ふ、其者に三味線が聞へるといへば聞ゆると答ふ、此場合は音楽と云ふを常に把握したることなかりしも三味線と云ふ觀念ありし爲め直ちに其觀念を起したる所以である。

暗示は同じ言を數回繰り返して暗示するにあらずれば奏効確實でない、反復

したる暗示は愈々明確となるものである。

有害なる暗示を避けよ、例へば肺が弱つたとか心臓が悪くなつて來たと云ふ如き暗示は有害となる、其他凡て暗示を與ふる時は覺醒後の影響に注意すべきである。

暗示の言語明瞭なれば觀念明瞭となるもので、其言語が弱ければ感動も従つて弱い故に暗示感性を強くするには此點に注意せねばならぬ。

### 第三節 進歩せる催眠法

現今世に行はれつゝある催眠方法は何れも一長一短を免れぬ、進歩せる催眠法とは一瞬間に無念無想の状態を構成する方式で余は多年研究の結果、左に述ぶる方式は其應用法が簡單で神速なる事、前後比類なきを信するのである。

術式——被術者をして座位又は椅子に掛けしめ、被術者の眼前に右の手を持ち行き掌を眼前に充て（掌にて眼を覆ふ如くすべし）上より下へ眼を壓する心もちで眼前一二寸の空間を早く撫て下す事二三度、此時「モ一君の眼は開かな



くなつて来たソレ其通り催眠術にかゝつて来た」と云へば之により豫期作用の働き強大となり速かに感應するに至る、若し感受性弱く眼を閉ぢざるものある時は閉目を命じ前額に掌をあて、前の如き暗示を反復する事が必要である。

方法の秘奥——此の方式を以てすれば何人も催眠せしむることを得るも初學者にありては其呼吸を知る事最も必要である、即ち言語を以て被術者の催眠状態惹起の暗示を適當に與ふると同時に被術者の兩肩を軽く撫で下ろし又は顚顚部を兩の中指にて軽く壓迫する等常に注意を術者に注がしむるが如きは初學者は固より一般術者の施術上有力なる秘奥と云ふべきである。

心理的方法、生理的方法の區別——心理的方法とは言語を以て催眠状態即ち無念無想の境に導き、或は術者の人格に感動して無言の中に暗示に感應なす等の類であつて、最も優れる方法である、然れ共初學者又は被術者に信用なき術者にてはよく言語のみを以て容易に催眠に導くの不可能なるものもある。然し乍ら心理的方法は他の生理的方法を用ふる場合と雖も必ず併用すべきものにて催眠法中主要のものたるを記憶す可きである、彼の西洋に於けるクリスト又我

國に於ける弘法大師等が信者の病氣を癒し奇蹟を行ふたるが如きは何れも彼等が自己の一言一行を信ぜしむる事を得たる熱烈なる信仰心が暗示となりて奏効したるものにて、全然心理的に行はれたるものと云ふべきである。

生理的方法とは物質的方法により軽度の腦貧血を起さしめて、無念無想の境に導くべき方法にて例へば頸動脈や顚顚動脈を壓迫する等の方法である、又は身體を摩撫し深呼吸をなさしむる等生理上の法則に基き輕き腦貧血の状態を呈せしむるを云ふ、然し乍ら此方法は單獨を以て催眠に入れんとする場合往々注意散漫し易き憂あるを以て心理的方法と併用する事の有力なるや論を俟たぬ、要するに心理的、生理的の區別とは斯の如きことを云ふのである。

#### 第四節 催眠の覺醒法

催眠状態は放置するも自然に覺醒する性質を有するものなるも、極淺ひ催眠状態に在つては術者が被術者を放すと同時に覺醒し、深き催眠状態にあつては四五時間經過せざれば覺醒せざることもある、人爲的覺醒方法は即ち生理的方



法、心理的方法の二種に區別する。

生理的方法——被術者の目を強く吹くか眼瞼を摩擦するか、冷水を顔面に注ぐかする又寒冷の空氣に觸るれば覺醒する。

心理的方法——心理的は暗示を以て覺醒する方法で「今催眠状態を醒す私が一二三と云へば眼が開ひて覺醒する」と云ひて之を行へば直ぐに覺醒する、此方法にて覺醒せざる時は、背部を軽く二つ三つ打つか胸部を摩擦し覺醒暗示を與ふるをよこす、此摩擦は催眠せしむる時と反對に下より上にせねばならぬ。

尙被術者を覺醒せしむるには周到なる用意が必要である、不熟鍊なる術者に覺醒せられたる時は、覺醒後頭痛を起したり又不快の心持等種々の悪影響を遺すことがある、是等は注意が行届かざる爲めで、左に其最も必要なるものを述べてをく。

覺醒せしむる前には催眠状態中試みた、有意運動の束縛を解除することを忘れてはならぬ、例へば被術者の手又は足が動かぬと云ふ如き暗示をなした場合

は手及び足が元の如くよく動く様になれりよよく暗示し、通常状態に歸らしむる等である、若し之を忘る、時は覺醒後手足の自由利かざる様になることがある、凡て催眠中に暗示し行ひたる事柄を回想して、運動の束縛等の試験をなしたる時は必ず其れを解除すべき暗示を與へたる上覺醒させねばならぬ。

又覺醒せしむる場合には覺醒の豫期暗示を與ふべきである、即ち今覺醒せしむると云ふ觀念を起させ、然る後覺醒すべきで、決して急激に覺醒せしむべからざるを知らねばならぬ。

### 第五節 動物強制術

人類に對する催眠状態に酷似の現象が動物に於ても發見せられて居る、而して斯ういふ現象を起さうと思へば、實驗的に之れを生ずることは容易である、此の現象は啻に催眠状態に酷似して居るのみならず、恐らく其れと同一のものであるやうに思はれる、動物に就て始めて此の實驗をしたのは「アタチシウス、キルベル」といふ人で、其實験は一千六百四十六年に發表されて居る此の人は



「ジエシンコイット」宗の僧侶で埃及學の専門家であつた「ブライエルの説に據るゝ猶ほ此れよりも數年前に「ジユエンテル」さいふ人が此の實驗をして居たこのことである。

此等の學者の行なつた實驗は、猶ほ續いて行なはれて居るので、其の要點は下の様である、凡べて馬、牛、犬、猫、猿の如き動物及び野獸を馴らす人は、往々捕心術を應用して動物の眼をしばらく見詰めて居るゝ、動物は自ら求めて其の人に馴れん事を希望してくるのである、昔から俗間で鳥が蛇に魅られるといふことを信じて居るが、斯かる信念は日本にのみあるのみでなく、歐羅巴に於ても行はれて居るもので、或る學者は此れも矢張り捕心術の一種であるといふて居る、凡べて鳥類の内でも鶏、鶯鳥、はこ、うさぎ、雀、めじろの如きものは下の方法にて強制する事が出来るのである「テーブル」を黒色にて能くぬりつぶし、中央に一本の白堊の線を書き置き、其へ鶏或は小動物類を細き綱を以て足をしばり術者は靜かに右手食指と母指とでやわらかく鶏の嘴と眼との間をつまみ而して「テーブル」上に書きある白堊の線上に鶏の眼を押しあて、

白線を暫らく見詰させて置くゝ睡眠してしまふ、眠むつても荒々しき行ひはなき様注意しないゝ醒めてしまふ、此術を施術する時足音或は戸障子の明け建て等の如き物音をも注意しなければならのである、そうして、能く眠りに落ち入るか、もし睡眠状態をあらはさずして鶏でも或は他の小動物でも眼が開いて居ても、足がつかつてきた際は、最早や睡眠状態に酷似する現象なのであるから其場合で靜かに、足をしばつてある綱をこくのである、たゞひ綱がこかれても動物が依然の通り催眠状態となつて、強制されて居る、然し此の方法は經驗の少なき初術者に行ひやすき施術法にして、老熟すれば綱を以て足をしばらなくとも、白堊線を書かなくとも施術が出来得る方法もある、然し哺乳動物、兩生動物等の種類を施術する時は、光線の強き室内では餘程注意しないゝ、少しも感じない事がある、これは唯だ一例に依る強制術の方法で外にも澤山方法がある。



## 第三章 感應術

### 第一節 感應の原理

感應とは念力の波動に由つて起るものにて、相互間に意思通じ或は感ずるのみならずして廣く天地萬物に感通するものである。

凡そ意思なるものは或る目的物に對して注ぐものにて、其極點に到着して始めて其働きを現すものである、例へば光線を一燒點に集めて燃焼を來すが如く海湖に石を投じて音波の反響を生ぜしむが如く、所謂念動念波の波及に外ならざるものである。

茲に施感なる一つの衝動（念動）を與へて自己の意思を他に感受せしむることを得る、此は念力なるもの一種無形の勢力に轉化するに際して極微の顫動を起し、其波動（念波）を傳播すること恰も無線電信の如く、又は光線の「エーテル」波動に依るが如しである、而して一種の傳導分子に依つて目的點に波及

到達するので他の念力を感受して反應を現發するものと云ふべきである。

念力の感應は單に生物のみでなく、無生物にも猶よく波及することを得るのである、然して觀念聯想の法則にて之を見れば又廣義の暗示とも云ふことが出来る。

心性は實に聲形なき幽玄のものにて従つて時なく處なしと雖も、或る動機によりて躍如として形あり、又聲あるが如く發現する、實に其靈妙なる驚くべきものと云はねばならぬ。

凡そ物體は一見自動するが如きも其實自動せず、他の力を俟つて始めて運動を開始するものである、彼の草木金石より日月星辰に至る迄悉く他力を蒙らざるもの一としてなく、各々引力に依るに非らざれば他體の受けた運動を傳承するに過ぎぬのである。

反之心性作用は自動的にて悉く自ら記憶し、自ら思考し、活動するのみならず未知未然の事象をもよく推斷して事理に合せんとする。

聾者と雖も聲あるを識り盲者と云へ共又克く色あるを察するが如きは、所謂



吾人の心念の靈妙不可思議の作用でなければ能はざる處であつて心性は實に一種靈妙不可思議の力を備へて居る、即ち之れを名づけて感應と云ふのである。

蓋し心念機動の活躍は電氣の如く、磁力の如く感ずれば應じ動けば變じ其現象の奇なる事、世人之を一種の妖怪視し來れるも、今科學の進歩は其眞想を闡明するを得るに到つたのである。

### 第二節 感應の學術的觀察

神秘家ユーゴーは吾人の智識を論じて曰く「吾人の智識は先づ外界を知覺するに初り、次ぎに内界を觀じ、進んで神を見るに及びて其最高の境に達せり」と云ふべし、此境にありては單に沈思冥想するのみならず、深く神に没入して形骸を忘却したる最高の宗教意識に入るなり」と宜なる哉、古來の開山と呼ばれ名僧智識と稱せらる者皆此修養に依りて神佛を見、大我に接し悟道を得たのである。

吾々も又單なる外界の智識を得るのみならずして内界を觀じ、進んで神を見

るの境に達せなければならぬ、クリストは「求めよ然らば與へられん」と説いた、吾人も亦是を求むるに切であつたならば必ずや與へられざるの理がない、然し求むる心は勿論一意專念でなければならぬ。

一意專念に事に従ふ時は心理學上の專制思想と豫期作用と相結合して一團となり、他の觀念悉く遁竄して以て感覺を止むるに至るものである、即ち神下るべしと豫期して心力を之れに凝集せば、思想は此の一點に集り他の觀念は全く空虚となりて感覺も亦こゝに集中して終りに神を見る事が出来る、精神は身體の主權者である、心力を一點に集中せば身體又隨つて異狀を生ずパウエルセンは其哲學概論に曰く「一切の心意過程には必ず是に平行して伴起する物質過程あり一切の物質過程には必ず是に平行して伴起する心意過程あり」として居る。

更に一步を進めて「此兩面中實在の眞想を示すものは心にして、物質の面は單に其外的の現象に過ぎず」と一元説を唱へた、之至言と云ふべく物、心は宇宙の現象で其實在海上に浮べる波に過ぎん、洋々たる大海の波時に小漣細波となり、時に驚瀾怒濤となるも波と波相關連して分離し得ざる如く、物は心に



影響し、心は物に影響す、扱て又物質と物質と相關聯し、精神と精神と相感應す、即ち物と物、心と心、物と心、心と物、皆無盡に影響し以て無限の大自然を組織する所、秩序整然一糸も亂れず又至妙と云ふべきである。

試みに卓上の（コップ）に就て、何故に安然と位置して居るかを考えて見んに、是れ地球に引力があるからで、地球に引力あればこそ家屋は其上に建設せられ、卓も亦其上に配置されるのである、然らば此コップの一動一静は直に地球の引力に影響し、地球と太陽亦引力關係を離れず太陽系の諸星又同様である、大千世界の諸星皆此の關係を離れることが出来ぬ、斯の如く諸星皆な同一の關係を有するを會得したならば、例へば一コップにせよ其動静は直に全宇宙に影響するの理を容易に覺れるであらう、而して其コップの動と静とは一に人心の左右に任ずるものなるを以て人心は即ち全宇宙を動かすの力有り云ふを得べきである、與へて云はんか一塵法界を盡し、奪つて云はんか法界一塵に攝る、之を我なりと稱せんか彼なりと稱せんか、物と云はんか心と云はんか、宇宙は唯是一體、暫く個々差別の現象を見んか、悉く之れ始あり終あり、生あり

滅あり一として有限の體にあらざるはない、顧慮せよ自ら萬物の靈長と稱するも何ぞ知らん五尺の短身五十年の生命、之を宇宙の大なるに比へんか、大海の一粟と何の撰ぶ所あらんやで、見聞、覺知、苦樂、昇沈皆有限である、水と波とは不二なる如く、此有限の吾人も亦直に宇宙の大精神と別離するの理あらんや、一切の現象は其實在海上の波、有限相對の現象、皆是れ無限絶對の中にある、是れを是近世哲學の承認せる現象即ち實在論と云ふのである、此理は直に以て吾人が心裡に應用する事を得、有限にして小なる我が心も、差別の感を去り自他彼此の差別をよく除去したならば、風なく波平かなるが如く心は直に宇宙の大精神と相合して圓なること大空の如くなるのである、此の宇宙の大精神をして神と呼び得るならば吾人は此の理によつて神人合一なりと稱するを憚らぬ、此大精神を佛性なりと名づけ得べくば吾人亦此理によりて佛性の徹見と云ふを得ん、而して是等は一に心力を凝集し以て此の大精神を觀念するにあらざれば到底成し得べからずで、余の稱ふる冥想は是れ神人合一、佛性徹見の一方法なりと云ふまで、ある。



## 第三節 氣 合 術

氣合術とは精神と精神と相對したる時彼我の氣を合せるを云ふので、一方の精神が一方の精神をして牽制し以て活殺自在ならしむの謂である、凡て精神力を一集點に集め其れを或る一事物の上に集注すること、即ち吾人が全力を傾倒して是非或る目的を徹底せざれば已まずとする精神の氣魄は所謂氣合術に外ならぬのである。

而して其目的に向つて勢力を集中するに際しては自己の精神に何等の碍滯もなく、恐怖もなく、邪念もなく、虚無恬澹として活躍自在縦横無礙の状態に達するを云ふのである。

由來氣合術なるものは我國武士道中、古來より劍道柔道の極意として重んぜられ、従つて劍道若しくは柔道の達人とさへ云へば亦必ず氣合術の達人たりし者である、然るに生存競争の劇烈なるにつれて遂に自己の保護策として用ふるになり、殊に現今は氣合療法として疾病治療上に應用せられつゝあるは、吾人

の快心に絶へざる次第である、而して是等は皆感應作用の理に基くものにて、之れ亦殆んど處世と百般に必要を認めらるゝに至れる所以である、即ち相撲道に於ける、宗教に於ける教育に於ける、藝術に於ける、實業に於ける、政治に於ける、苟も人の頭目となり成功を期せんとする者は是非共此妙用を極めなければならぬ、一度是れが奥義を極めんか其及ぼす感應の威力は到底常人の圖り識るべからざるものがある、猶古今の英雄と稱せられし者必ず是れによつて敵をして奇策を弄するの猶豫なからしめ、以て大功を奏せしに相違ない、然れ共本章の主眼とする處は疾病の治療上に就てのみ述ふるの考へなるを以て次に之れが修養に移ることとする。

何れに於ても欠くべからざる者なるも殊に斯術に於ては其姿勢を以て第一要件となつてをる、即ち身體を胖にし、常に柔にして而も護謨鞠の如く弾力あり不倒の姿勢を保つことが肝要である、此條件に適するには丹田に力を集中して胸腹を虚にすべく是又體容と呼吸と相待つて練習するの必要がある。

凡て此姿勢なるもの、精神に及ばず影響の大なるは論を俟たぬ、異常の姿勢



が種々の悪感を惹起するは吾人の日常經驗する所である。

其他眼力、及び手の固め方、足腰の供へ等種々あるも施術上一定を要せず猶修養上に於ては後章にある精神統一の項を熟讀せられたし。

要は之によつて吾人の有する潜在心を鍛鍊し確乎不動の心念を養成すれば、この意識なるもの對者の疾病に傳達し以て治癒の効を現はすものである。

#### 第四節 降 神 術

彼の巫覡、口寄、縣神子、梓神子、稻荷降し等のよく吉凶禍福を判断し、又疾病を所謂非醫學的方法を施して治癒せしめる等、各其形式に差あるも何れも自己の身體に神靈を乗り移らしめ以て諸種の諮詢をなす方法にて、是又一種の感應作用である、而して彼等が能く未來の事を豫言し適中するも、それは全く精神的作用に基くものにて、決して鬼神狐狸の人身に憑附し幽冥界の事を告ぐるものではない、其精神上の状態は本人と雖も詳かに感知し難しと云ふも、要するに彼等は吾人の稱ゆる精神統一により、其求むる所の一點に自己の精神を聚

合する事により其一小部分が鋭敏となり、以て他人の思考出來ざる事を考へ亦常人の及ばざる事を行ふものなるは蓋し疑ふべからずである、而して是等の特絶なる現象は理學上より論ずべからざるものなりと云ふも、此種の術者には常人に特絶せる思想及び感覺を有するは事實で、予は此の特絶せる性格の外に術者自身の修養により、其精神が自己の豫期せる信念の發動によりて、感應するものなりと斷言して憚らざる者である。

歐米に於ても此感應術が盛んに行はれ従つて其記録は亦甚だ多い、彼の羅馬法王の「ゲレゴリー」六世、同七世、「ベチゾクト」九世の如き中古に於ては伊太利のシオルダノ、ブルノの著「カンデライオ」に生、死の靈會合の媒介ありし記述があり、近世に於ても西歴千八百八十九年佛國巴里に於て降神術大會の會催あり術者會員各國を通じて一千五百萬人の多數に上り而も之を信奉せし人物中英雄、學者等の多かりしは事實である、今其際行はれし降神術の方法を記さんに、(1)音響によつて神靈の意を知る、(2)降神術師の口を借りて神靈の意を知る、(3)筆記にて神靈の意を知らしむる事、(4)卓子を自働せしむ、



(5)家具の自動すること、(6)戸障子の如き建物が自ら開閉する、(7)輕重寒暖の變更、(8)音樂が自然に聞ゆる、(9)屋鳴り震動する、(10)五光を發して中空に揚り高窓から出入をする、等(4)以下の如く不可思議なる現象を呈せしこと、以上の隆盛を極むるに至りしは、今より六十五年以前合衆國の美以教會の信者の宅にて或時突然家具が動き出し、又夜中に人の目に見へぬ手が子女の身體を撫でり云ふことが動機で、其信者の「ケサリン」云ふ末女が降神術師となつて、吉凶禍福を神靈に問ふことを得た、此一事が英國に普及し次で獨乙露西亞、佛蘭西等に迄傳播して非常なる勢力となり、殆んど此術の行はれざる所無きに至つたのである。

我國に於ても、神武天皇以來歷朝の御主意により神靈の意に隨つて政治を行はせられし事は明にて、降神術は治國の上よりも之が發達の運命を持ち居り戰場に於ける進退の如きも之によつて士氣を勵ませし事實がある、而して當時は主に僧侶によつて行はれつゝありしも、現代に至りて稻荷降し、梓神子、口寄等の流行となつたのである。

### 第五節 特種の感應術

抑も感應の作用たるや、人類及び動物に對してのみ行はるゝにあらで、生物以外にもよく其の妙術を現はす事を得らるゝ、例へば義經が金盃の熱したるを手にして平然たる如き、日蓮の弟子日親が燒鍋を被つて濟し居たる如き、基督が湖上を歩みて水中に沈まざりし如き、法華經の所謂水も溺す能はず、火も亦燒く能はずは皆此の感應の妙力によるものにて水火も刀刃も敢て害を加ふることを得ざるに至るものである。

感應の力なるものゝ、至極玄妙不可思議を極むることは、彼の眞言宗の權威内にありて其根本義と稱せらるゝ、即ち眞言秘密中の所謂九字護身法と稱するもの之である、以下その種類を参考迄に略述することゝする。

九字護身法の略説——(1)淨三業の印、(身に意の作りたる罪業を滅し清淨ならしむ云ふ)、(2)佛部三昧耶の印、(三世諸佛の護念を得て壽命を増し福惠を受くる云ふ)、(3)蓮華部三昧耶の印、(觀世音諸菩薩の加持を得て一切の



業障を消滅する云ふ)、(4)金剛部三昧耶の印、(金剛部の諸尊の靈顯を蒙り一切の病難を除き堅固の體となる云ふ)、(5)被甲護身の印、(諸の天魔の障碍を除き一切の厄難を避く云ふ)

以上を護身法と稱ふるので、其印の結び方及び呪文の唱へ方は茲に必要なきを以て省くこととする、要するに印及び呪文其物が効力あるにあらずして、自己の信念によつて生ずる、感應の威力が効果を生ずるものなるは明である。

次に九字も又同様の理にして、九字とは即ち「臨、兵、闘、者、皆、陳、烈、在、前」の九語を稱へ又手の指を各九種に結び換へ、後より縦横に空中を切る形をなす、之を行ふ修験者の熟練せし者は、實に其手先の莊嚴にして又唱ふる呪文の奇警たる此行爲が即ち被術者に感應を與ふるものにて、靈驗は之より起るのである。

其他「十字の大事」さて

「天、龍、虎、王、命、勝、行、鬼、水、散」等の方法もあるが其結果は皆同一である。

## 第六節 感應療法

感應療法を施す上に於て第一の要件とするは、被術者をして自己の疾病は此療法を介して必ず治癒するものなりとの信念を起させることである、而して此信念が被術者の脳中に確乎として印象する時に、感覺機關に影響を及ぼし従つて患部の神経組織に異變を生じ、疾病の退治を成すに至るもので、是れ心身兩者の關係上生ずる現象にして吾人の身體に變動起る時は心性に反應を來し心性に反應を來たさるか、又感覺機關にも同様の影響を及ぼすに至るの理に依り明である。斯の如く相傳へ相感する機能を念通又は感通と云ひ、其結果を感應と云ふのである、而して感應の有無及多少は念動力の強弱に比例するものにて、施術者の意志強固たれば従つて感應著しく、反之其意志微弱なれば感應又微弱にて、時として効力なき事ありと知るべきである。

抑も此感應的療法は普通醫術に於ても常に行はるゝ實例が多い、今其一端を示せば醫師が臨床上或る場合に於て、氣安めの投劑と稱し毒にも藥にもならず



る藥劑を與へ、自然に病の治するを待つことが往々ある、之を醫學上自然療法又は對期療法と云ふてをる、然れ共患者及び家人等の側より見れば醫師の投劑は、必ず治病の効驗あるものなりと云ふ觀念が其腦中にあるを以て、乃ち感應の妙用に由りて自然に治癒の効を奏するに外ならないのである、従つて醫術の巧拙は實に此の妙能の應用如何に在りと云ふも不可なるべしと信ずるのである。

殊にヒステリー等の腦神系患者に對しては、鎮痛又は睡眠藥と稱して單に蒸餾水を注射し若くは少量の葛粉等を頓服せしめ、奇効を奏する事あるは醫家の敢て珍とせざる所である。

其他信仰上に於て彼の金光、天理等の各教會が信者に與ふる、所謂神水と稱するもの畢竟此の力を利用したものである。

### 第七節 災害豫知法

古來災害豫防術と稱し或は豫知法とて、幾多の傳説等を耳にせしこと尠ならずと雖も、何れも其根據薄弱にして採るに足るものあらざりしが、頃日余の知人某氏の令妻、足の裏の痒さにて日々の我家の來客を前日乃至、數時間前に豫知するに聞き居りしが、數日前にも余が同氏宅を訪問し、主人と對談中、唯今兩足の裏に急に痒みを感じました故二三時間後に必ず男女の客あるを告ぐ、然るにそれより凡そ三時間後に至り、同氏宅を辭し去らんとするや、恰も余と入交ひに夫婦連れの來客あり、其的中に驚けり、其後同主人の談に曰く以上の如きは稀なるも、大抵十中の八九は的中するに、而して其前知に際し、痒みを感じし部分、例へば、足の踵、或は中程、指先等にて近親なるか、初對面なるか、唯心安き友人等なるかを知り、尙左右の別にて男女の區別を豫言するに、詳しく談れり、余思へらく以上は其一例に過ぎざるも、吾人日々微細なることに、最も注意を拂へば必ずや、前述の如き或種の特徴を見出す事を得べしと信ず、最



も是等は萬人一様と云ふ譯には勿論行かざるも、其修養につれて、種々なる現象を生ず、例へば静座瞑目兩手を膝に載せ、翌日の天候如何にご自問を經續せんか、晴天なれば一種奇異の感通に打たれ、若し曇天又は雨天なれば、何等の感覺を生ぜず、之れに成功せば次には暴風雨なるや、地震なるや、若しくは半晴なるや如何と、身體の或る局部に感通を覺ゆるまで徐ろに自問すべし、之れに慣るれば居ながらにして、前日に天候を豫知することを得、即ち感通の第一歩である、然れ共以上は其修養に時間を要し、且つ人により遲速は免れざれば科學的説明は省略し、次に古來より傳はれる、最も簡單にして行ひ易き實例の二三を參考として述べることにする。

一、途中遭難の豫知法。外出する前に、先づ目を軽く閉ぢ、まながしらの處を中指にて押し、まなじりの方をザーツと見る、斯くすること必ず、恰もまぼろしの如く金光の輪が、ぐる／＼動いて見へるものである、若し其の光りが見へぬ時は、何か變事ある兆なれば、要慎警戒を要しあり。

二、火災の豫知法。昔より鼠の居らざるなるを、火災の前兆なりなど云ひ傳ふ

れど、是等はをそらく迷信的傳説として一笑に附し居れど、左に一寸變つた一方法を照會せよう、晝夜に限らず、近火の際に早速蠟燭に火を點じ、其蠟燭の燃へ居る眞の先き、青く見えざれば、火災に遭ふの前兆なりと、之は普通必ず青く見ゆるものである。

三、三脈術。之も古くより傳はり居る方法にて、殊に東京にて有名なる守田寶丹翁が、積年實地に研究せる結果正確なる奇効を顯はせる豫知法である、而して其實験も頗る容易にして身に降りかゝる一切の災害を未然に知り、又死期をも豫知することが出来ることである、偕其方法は左の二種ある、其一は左の手にて、頬の上より兩側の奥齒の下にある、動脈を測り、同時に右手を以て左手の脈搏を之に比較し三所とも同時に平均を測る、若し奥齒の下の脈微にて測り難き時は、同じく左の手にて俗に云ふ吭佛の兩側にある頸動脈を測り、同時に前と同じく右手を以て、左手の脈搏を診し以上何れも三所とも同時に脈搏を數ふことが出来たならば、ヨシ目前に災害が起つても、其身は必ず安全である、之に反して三所の脈が各々不揃である時は二十四時



間内に何等か凶變が、身邊に迫るのだと云ふので、その時は十分警戒をせねばならん、而して之を一日兩三回も試みるに神經衰弱の如き者杯は、確に勇氣を百倍する事が出来るべく之も、吾人に採りては一良法なりと思ひ、茲に加ふることにした。

## 第四章 精神眞理綜合論

### 第一節 唯物、唯心を論ず

現代に於ける社會は全く相反する二個の矛盾に逢着して殆んど其歸趣に迷ひつゝあるのである、其一つは科學的思想の普及にて他の一つは即ち精神的思潮の勃興である、科學者は眞の實在は物質のみにして精神の如きは物質の作用より生ずる一現象に過ぎずと主張し、精神論者は精神は永久に眞在し物質の如きは精神の變化に隨伴して生滅するものと説いている。

古來より唯心と唯物は何れの時代を問はず絶へずに此二つの主義の争闘が存

續し來つたのである、然し乍ら現代の如く社會一般の注視する處とならずして只心理學者哲學者等の階級に於ける一部の閑事業として、一般には何等の關係もなきものと思意したのである、然るに最近精神的の學問が處世上に應用せられ發展の結果偉大なる事を理解するに至り、幾多の識者間に注意を拂ふ者漸く増加するに至つたのである。

從來の醫學は人間を全く物質的機械と同視して死物扱にし失敗に終る事の明瞭となれるに反して、精神療法は精神的實在なりと云ふ見地の上に基礎を置いて發生の日淺きに拘はらず異常なる好成绩を收め、今や社會注視の燒點となつて居る、唯心論の面目茲に一新し其對敵たる唯物論の如き恐るゝに足らざるに到つたのである。

今之れを事實に就て見るも精神療法の爲め治癒者の續々發生し、醫學の原理に照して不治の診斷を受けしものが此結果であるのは偉大の効力を裏書するものと云はなければならぬ。

精神療法の要點は勿論人を活かすにあるので、言を換へて云へば物質的に死



せる者をして精神的に蘇生せしむるのである、故に此根本を忘れて單に身體の上に現はれたる病のみを癒さんとするも、其効果は決して良好なる結果を來たすものではない、殊更に病を癒す事に腐心せずとも適當本療法を應用する時は病は自ら消滅するに到るものである。

### 第二節 心靈界の自然法

成長と云ふことは生物に特有の現象である、而して生物の進化するのは其發達の義なりと云はねばならぬ、實に成長は天然にして天然とは自動的に發達するの意である、今植物の發達する様を見るに之が成長に必要な光線、空氣、濕氣等、草木は皆自然を信賴するのみで雨露は來り、太陽は熱と光線とを無限に供給し、空氣又常に新陳代謝して自由に呼吸を爲さしめ、野邊の草花と雖も需めずして與へられ、勞せずして養はれてをる、之只單純なる自然力に信賴し服從するのみで成長と美とは期せずして來るのである、鳥類又然りて蒔かず蒔らず貯へざるも、自然は日々の糧を與へて更に憂へしめぬ、自然なるもの、豈

用意周到と稱せねばならぬ、加之彼等は織らず染めず紡かざるも、寒からず暑からず、羽と云ふ衣服を與へて常に不自由を感じしめぬ、造化の妙は誠に驚くの外はない、而して人も又自然の一部分にて造化の妙用を蒙るべきは當然である、然るに人類のみ多く之に反して居る、何故に如斯矛盾の生ずるか、それは人間には他生物の如き無限の信賴なく、妄りに過去を悔ひ、將來を憂慮して虚榮疾病等寸時も心を悩まさぐる事なく所謂自然に服從し從て安心してふことを得ざる爲なのである。

自然力に信賴して努力奮闘すべきは、生物向上の唯一秘訣なりと云ふべく從て、奮闘的努力止まんか又進歩も已み發達の停止は即ち退歩の第一歩となるや必然である、従つて努力の發足は生活進路の基點にして退化に向つて發足せんかそは死の初めなりと云ふべしである、而して生物の死に到達する迄には幾多の階級を経る者なるも、其過程極めて徐々にして之れを智覺するの甚だ困難である、風雨は偶然に來ると考ふるも、そは俗人の見解にて只朝に吹き夕に降るものなりとして居るも、皆幾長日月の以前より定まれる過程を通じて漸く茲に



顯はるゝものである、彼の月蝕、日蝕たりとも決して偶然にあらざるを知る如く、天體の運行は又極めて正確で何事に由らず突然に起るゝ見るは凡俗の愚見である、將來の結果を靜慮して其原因に注意するは智者の用意と云ふべく、吾人の人生なるものも其長短を窺ひ知る事は能はぬ、故に之れを天壽と云ふのである、天壽とは命數の意にて實際に於て如何なる力も左右することを許さない即ち自己の命數は自己之れを決定する外何人も之れに干涉する事は出来ぬ、茲に於て原因結果の理も解すべく、所謂今日の幸運は過去の善行の報酬にして從て疾病も苦痛も皆過去に於て造りし因縁の賜と知ることが出来る、明日の幸福は今日の生活と直接の關係在る事は殊に注意を要すべきである、此理を推して考ふる時は退化とは爲すべき事を爲さずして、又爲すべからざる事をなす爲めに來る必然の結果である、有意的又は無意的に天然の命する努力、精進等を忌みて怠惰、放縱の心を起し折角與へられたる精力を充分に發揚せざる者に對して賦課せらるべき自然の報償である。

### 第三節 觀念の働作

吾人が宇宙間の森羅萬象を知るのは、感覺し、知覺せるに依るものにて、既に知覺し經驗したる事物は其外界の刺戟消滅するも、猶腦中に潜在し其後機會を得る毎に意識に表現する、之れを名づけて觀念と云ふのである。

此觀念は心の奥底に潜在し、必要の場合には顯在意識となりて現出するのである、人は日常命令せらるゝ觀念を受容し動作に表現せんとする、自然的通有の傾向を有するものである。

ダーワンの進化論により進化の法則に就て一例を擧ぐれば、

生物殊に人間は肉體の保存、子孫生殖、種族保存、社交等の本能を有するものにして、是等は何人より教はりしと云ふにあらず、自然に備はれる所にして之れにつき古來より東西の學者は神の攝理と謂ひ、又佛の妙用と云ひ、或は是れ本能性なりと稱ふるも、歸着する處は同一にして、必竟吾人の身體及精神作用が殆んど不可思議なる位の巧妙に構成せられ居る事を云ふに過ぎぬ、茲に於



てか人の暗示感性を有する事、觀念動作の現象も、此一部なることを知り得るのである。

吾人が誤つて負傷し醫師の手當を受くることせんか、醫師は疵口を石炭酸水等にて洗ひ之に繃酸軟膏等を塗り、ガーゼを當て繃帶を施す、斯くすること一定の時日を経過すれば疵は自然に癒ゆる、此時諸氏は何によつて癒へたこと考ふるや始め醫師より施されたる軟膏類及びガーゼ繃帶は、如何に分拆するも何等血となり肉となるべき精分を見ず、然らば何者の爲めに癒へたるか之ぞ、吾人の身體に宿れるエチルギーの力に外ならないのである、其他例を擧ぐれば枚舉に遑なきも生存上必要なる業務、社交、生殖等の能力の如き、常に吾人の意識に上らざる其勢力は、意識せる能力の幾十倍なるや知るべきである、斯の如く心は單に意識として顯在する活動のみならずして、潜在せる精神の作用であつて自然療能の結果である。

#### 第四節 醫術と精神療法

醫學上では人間を死せる物質的の機械として取扱つて居る、であるから生命の發動點である處の宇宙の自然方則などに對しては少しも注意を拂つては居ない、元來人間の生活には二面ある、一つは物質的肉體の生活であつて、其二は精神的な生活である、今日の醫學にはどうしても之れを重要視して居ること見ることは出来ない、此人間の尤も大切な精神的方面を輕視して肉體のみの研究に重きを置ける結果は、知らずくの間人間を一般動物と同一の位置に迄下落せしめたのである、心は心の目を以て見ることは容易であるが、肉眼を以て見る事は六ヶしい、現代多くの醫者の心眼は殆んど盲目であること云てよい、しかし全然心の存在を否認する者計りではないが、一般に心が肉體に及ぼす影響を看過して心と肉體とは各別々に働くものと考へて居る、そうして病は肉體の煩ひであるから、之れに物質的藥劑を用ゆれば之に由つて完全に補修せられること云ふのである、然し肉體の奥には精神があり、精神の奥には宇宙の自然的原則



なるものがある。

肉體の働くのは何が故であるか、悉く心の支配を受けて働くのであつて、夫れ自體活動するものではない。心が痛みを感じるが故に肉體は痛み、心が喜ぶから肉體が快感を催すのである。

前述の如く肉體は精神の命令に従つて初めて活動するものであるから、物理的の原則に支配さるべきものではない、此點は一度精神療法の如何なるものなるやを知るに至れば其疑問は自ら氷解する譯である、物質は必ず滅するものであるが精神は不滅である、此不滅の精神に支配されて居る間は肉體も又不滅の力を持って居る、故に能く水火に耐へる事が出来るので「火燈滅却すれば火も又寒し」とは此間の消息を能く言ひ現したものである。

然るに今日の醫學は全く此明白なる道理を看過して、人間の身體は死せる機械と同一のものなりと假定の上に治療の基礎を置くが故に、其効果の完からざるも當然な譯である、動物は自然の法則に對して機械的に服従するものであるけれども、人間は之れを理解し取捨選擇するものにて又之を支配する事が出来る、従つて人間を物質なりと断定せる醫學の上の見解は全然其誤謬なること明了なりと云はねばならぬ。

### 第五節 人體概論

人體を大別して外形によりて分つ時は頭、頸、胸、上肢下肢となる、上肢を手と稱し下肢を足を稱するのである。

内部によりて分てば、體形を支ふる骨格あり主軸は脊柱をなし、支軸は上下の二肢を支ふ。

脊柱の前後に内腔あり、前の大なるを胸腔と云ふ、主として身體の營養に關する臓器を藏む、横隔膜によりて上下の二部に分たれ上方を胸腔と云ひ中に心臓及左右一對の肺臓あり、下方を腹腔と名づけ、胃、腸、肝臓、腎臓、脾臓、を藏す、後の小なるは脊髓腔と稱して其上部は頭蓋骨肉に開通して、頭蓋腔をなす之れ即ち腦髓のある所である。

體内には筋肉、脈管、神經等ありて生活機能を營むのである。



人體を構成する器官は、骨、靱帶、筋、神經、脈管、感覺器、消化器、呼吸器、泌尿生殖器等である。

此器管の結合は微小なる有機體の無數よりなる、之を名づけて細胞と云ふのである、此細胞が互に相集合して器管を作る之を稱して組織と云ふ、人體に屬する組織の主なるものに、上皮組織、結締質組織、筋組織、神經組織、脈管組織がある、而して各器管は是等組織の一種若くは數種相集りて成るものにて之を細別すれば結締質組織は更に纖維様結締組織、軟骨組織、硬骨組織の三に分れ筋組織は滑平筋、横紋筋の二に分る、前者は主として内腔の諸臟器を組織し、後者は主として普通の筋肉を組織する、又脈管組織は心臟、動脈、靜脈、毛細管、淋巴管及び脈管に屬する腺組織に分るゝのである。

以上は極く概論に過ぎざるも、吾人の體内に於ける種々の活動が、其根源は細胞の組織に出でし事を知る事が出来る、然り疾病の治又は不治と云ふも細胞の働の合理、不合理の作用と稱し得べく、即ち精神療法は精神の力を以て其細胞の働を合理的に促したる爲めに疾病を治し得たのであるとも謂ひ得らるゝのである。

#### 第六節 精神眞理綜合治療法

既に理解の全般を詳述したるを以て、本節に於ては最も了解し易く具體的に施術の方法と形式とを順序を追つて述べよう。

苟も治療を他に施さんとするものは一應醫學上に涉りて解剖、生理、病理、診斷等の大體を取檢べ記憶し置くべきは勿論である、而して愈々患者に向ひたる場合は慎重の態度を以て、熱誠と同情を離れず、病症及び苦痛の箇所年齢等を詳細に尋問するものである、醫師の診斷書あれば最も良し、尙是迄の經過及び他に於ける精神療法の施術の有無及効果なども聞き、殊に注意を要するは患者をして反感を抱かさしめざる様、其彼術者の智識程度に應じて相當の言語を用ひ決して不快の觀念等を起さざる様心懸けねばならぬ。

一般治療家として唯に施術の巧妙のみを極めんとする者あるも、殊に精神治療家たるものは、其患者の觀察法にも長ぜねばならぬ、即ち談話中にも敬愛の



念を起させ、次で體質の如何、及衰弱の程度を知覺することは施術上、又最も必要である、而し疾病の原因を充分に考察して、其原因の治療を主眼とせねばならぬ。

扱て前項の順序を充分に終つた後は、(患者の座臥を問はず) 信仰心ある者には平常其信仰せる神佛を念せしめること「以上信仰應用」(但し信仰心なきものは直ちに次に移るること) 次に軽く閉目を命じて雑念を除かしむること同時に調息に就ても注意し、是より施術する旨を告ぐるべし「以上催眠術應用」

斯く準備を運びたる後、術者は左右両掌を組み合せ人差指を立て、相對せしめ、自己の腹部(丹田)に供へ、被術者の病因全治又は疼痛驅除すこの熟語なる思念を凝らし、凡そ二三分間充分統一を計りて被術者の呼吸を伺ひ、其の呼氣の刹那に際し術者の熱誠なる思念を被術者に徹底せしむべく、其組合せたる指先を其儘被術者の疾病を突く如き心持ちにて、両腕を前に延ばし同時にエトエ腹の底より力の籠れる念聲を發し、直ちに被術者の着衣の上より患部を數回軽く撫擦すべし(此間前後通じて五分乃至十分間)「以上氣合及感應術應用」

之れは實驗の結果効果最も顯著にして、且つ被術者に多く手を觸るゝ事もなく其術式の方法も又冠たる理想的施術法である、然れ共最後に發する氣合に就き多少の非難は免がれぬが、從て茲が術者の最も主眼とする處である、即ち被術者の意志及身體の強弱に應じて發聲も加減なすべく、強ちエトと發するにも及ばず「ソレ」「ソツ」等の普常の音を發する場合もある、何故之を必要とするかはれ施術上統一せる思念を被術者に傳達すること同時に、終りを告ぐる暗示となるべく、試みに之を廢せんか唯思念し靈動を與へしのみにては、其効果に於て確かに差異を生ずに至る、これは實驗せしもの、等しく認むる所で、又被術者の地位に立ちて考ふるも誠に便りなく感じて、其効果を疑ひ引いて好績を擧げ難き場合が多い。

以上は永年幾多の療法に就き實驗し實踐して各法術の長所を捕足し工夫して効蹟を擧げつゝあるものにて、現代に於ける精神療法中の極致と云ふべく、諸士も此方法の練習によりて、其即効威大なるを信するに至るを疑はぬ、本法の秘訣と云ふべきは術者の意思を念動念波の理によつて、被術者に傳達し被術者



は之を收受するに由つて心門を開き、其凝結せる思念靈通して被術者の心底に合體し、神明に通ずるものにて、要之双方共相合せる心念の燒點が、熾烈なる熱火となりて、病因を燒却し盡すものと云ふべく、古語に曰く「陽氣の發する處金石も亦透る」と抑も此陽氣なるもの必ずしも太陽の光線のみに定まれるものならんや、吾人の至誠天に通ずるてふ誠心も又之である、恐れ多くも明治天皇の御製に「目に見えぬ神の心に通ふこそ、人の心のまことなりけれ」とあり。諺にも至誠神に通ずると云ふことがある、精神療法は即ち至誠人を療やすものにて、病者を治療するに當り如何に形式を立派に、如何に風彩態度が備つて居ても此至誠の二字を欠いては、決して完全なる治療を得るものではないことを忘れてはならぬ。

### 第七節 遠隔療法

諸君は既に人類の疾病に關する原因と結果を明かにし、且つ種々の流行し來れる治療法の眞偽を識別して、其眞理を綜合せる余が苦修研究になれる、所謂

治療法の眞髓を會得せられたであらう、今茲に世人の奇蹟中の奇蹟ともせる遠隔治療法を述べよう、此療法は直接患者に相對待せず、如何なる遠隔離にあるものにも治療を施す精神的感應による治療法である、抑も時間とか空間とか云ふことは、人類感覺の一形式に過ぎざれば、此感覺を超越したる精神界に於ては、之れ等の感念は一切消滅するものと云ふべく従つて此遠隔療法なるもの、事蹟に至りても世人の信疑に不係實際に於て事實の擧がれる以上之れを非認すべからざるものである、古き印度の文明時代にも盛に行はれ又基督もよく遠隔の地にある病者を癒せし事は、聖書の中に記載してある、諸氏は既に精神の自由自在にして物質的方法に由つて束縛する能はざるを信ぜられたこと、思ふ。

諸其方式に就き従來催眠術家等の一般に行ひ來りたる處のものは、先づ豫め書簡又は電話等を以て何日の何時何十分より貴殿に對す遠隔治療を行ふ旨を告げ置き、其間凡そ三十分間は一室に靜座し施術を受へしなご所謂被術者の信念を充分惹起せしめ得る様、注意を與へ行ふものにて是之場合に於ける奏効は恰も被術者が、自己感通法により治療の觀念を起し、主觀的に生ずる現象にして



術者の取るべき方式なるものも一定せず、唯臨機應變に被術者の豫期作用をのみ利用するに巧みなれば、容易に行はれるものである、然れ共如斯方法にては被術者が絶対に術者を信ぜる場合は兎も角概して無効に終るを常とす、今茲に従來本院にて行ひ來り、奏効的確なるものを述ぶる事とす、先づ患者の依頼狀に由り其病者の如何なる者なるかを想像すること、例へば、男女の別、年齢、病因、現今の症狀等詳細に辨へ、而して瞑想して病者の目前にある者と意思し前項の眞理綜合の術式即ち「左右兩掌を組み合せ人差指を相對せしめて自己の腹部(丹田)に供へ疼痛の驅除、病因の全治の思念を凝らし、眞に患者に相對する如く行ふこと前に同じくすること、初めは病者を腦裡に畫くに困難なる際多きものなれども其練習を重ねるに従ひ追々妙境に入ることを得るに到るものなり。最も慣れざる間は、一度直接施術せしことある患者に對して試み順次に進むも亦一良法である。

由來精神なるものは宇宙に充滿して、吾人の有する思想の貫徹力に抵抗し得るもの一として在らず、而して此處も彼處も更に相違はない、即ち面前に接し

て治療するも京都に在つて英京倫敦に居る人を治療するも其効果の及ぼす處又同一なりと云はねばならぬ、又人間の精神が常に傳達交通しつゝある事實を看取するも容易なるべく、而して是れが方法に至りても前項述べた處をよく翫味し一意専念、眞修すれば其被術者の病癖の何たるを問はず、崇高無限なる心靈の力を感應して疾病を撲滅すること敢て對座すること異なる事がない、元來精神療法なるもの其の眞理を解するに至れば是れが適否の爲めには疾病の種類は敢て問ふ處にあらず、然れ共精神療法の効果は正直にして温順なる性質の者程其効果顯著なるは事實である、之れ病は心の煩なりと云ふ理を明かにせる證據である。



## 第五章 臨床應用編

### 神經衰弱症

【原因】 遺傳法の素質に多きも他に身體及び精神的過勞、睡眠不足、傳染病後の衰弱、房事過度、慢性中毒(喫煙、飲酒、茶、阿片等の)手淫、亂行、頭部の創傷等より發し壯年期に多し。

【症候】 神経系刺激せられ易く、且其能力を減ずるを言ふ、腦髓性、脊髓性に分ち、往々併發性の者もあり、腦髓性本症にありて神經過敏となり、感情激變して萬事を悲觀し、記憶力は減退して精神的事業に従ふの力なく、頭重又は頭痛を訴へ、五官器は屢々過敏となりて直に疲勞し、不眠症に陥る。又懷疑、厭世に奔り、衆人稠坐を厭ひ、大河を見て戰慄し、不潔を忌み、閉室廣底を恐るゝ、杯、種々の恐怖状態を爲す者あり、又内部器官に在りては胃に消化不良を起し心臟動作の不調、血行遲鈍、手足厥冷、便秘を發す。脊髓性の者に於ては晨起既に筋肉の疲勞を覺え、關節顫ひ、皮膚知覺に蟻走狀感覺を訴へ、歩行の際

下肢諸筋の痙攣する事あり、薦骨部脊椎骨を壓して疼痛を發する事あり、經過は概ね慢性にして數ヶ月乃至數年に亘る。

附記 【外傷性神経症】 近來發見せられたる一種の神経性の變態にして神経衰弱及びヒステリーに類似す、即ち痲痺、痙攣、震顫、感覺障害、一般の衰弱、不安等の徵候を示せども、其發生の動機を異にする者にして、負傷、變災、電撃、墜落等の後、身體上に害を蒙らずして、生命の危險に瀕したる刹那に發する者多し。即ち不意の災害に痛く神経を刺激し、自己の容態を重大視し、意氣鬱憂甚だしきは狂人の如くなる者あり、豫後良なれども永外くの惧あり。

【療法】 術者は施術前に一應患者の特種の自覺症、假へば頭重とは頭痛とか、記憶力減退或は懷疑、不眠等の有無を聽き置き、先づ君の神経衰弱は必ず全治する旨を告げ、次で「頭軽くなり頭痛止み記憶力能くなり精神爽快に随つて消化機能の働き旺盛となり食欲増進、便の快通」等順次に思念を凝し眞理綜合術を施すべし、而して以上の患者は勿論感應の強弱により其全治日數一定せずと



雖も、余の實驗上二三回にて全治する者或は二週間内外の日子を要する者もあるを以て、決して輕卒に全治日數等を豫告せざる様せらるべし。

#### 比 斯 的 里

【原因】 本病は全體の神経系を侵し、多く婦人に發す疾患にして、兩親の遺傳に來ること多し。其他驚愕、苦慮、戀愛、失望等の神経感動より發することあり、又身神の過動、食物の不良、運動の不全、傳染病後、中毒等其原因をなすことあり、或は荒淫、妊娠、月經の異常等に誘發せらるゝことあり、生殖器の疾患より起ることあり、而して年齢は十五歳乃至二十五歳に於て來ること多し稀には男子に發することあり。

【症候】 非常に多様なり、患者は自己のヒステリー性、即ち神経性機能障害を各器官、各體部に喚起するを以て總括し難し、先づ列擧すれば(一)些細の誘因に來る悲憤哀憂等精神感動の變化不定にして神經過敏となり、恐怖苦悶の狀を呈し、時として知覺錯迷に陥り、譫語を發し、眞の精神錯亂に及ぶことあり(二)五官機能の障害にして、視野縮少し、色盲、弱視、黒内障、耳鳴、難聽耳聾、

嗅味兩神経の異常を來し葉の戦き、鳥の囀りも猶人語と誤り怖るゝ事あり(三)知覺障害尤も普遍的に劇しき頭痛を感じ、時々體の一局所に急激なる疼痛を覺ゆることあり、觸感は一部份或は大部分鋭敏となり、又鈍くなり、或は全く喪失することあり、或は局所の麻痺を伴ひ甚しきは全身の半側に知覺亡失し、同半側の五官の動作を減することあり、今一側の亡失部に金屬板を貼して之を他側に移轉せしめ得ること尠からず、之を移轉法と稱す、皮膚知覺の過敏も隨所に發すれども殊に卵巢部に多し(三)運動の障害は更に多くして「攣縮」は上肢の屈筋下肢の伸筋咬筋等に發し「攣攣」は種々ありて欠伸發作、噴嚏發作、笑發作、涕泣發作等の諸攣攣にして患者感應性の昂上に隨ひ隨意筋の發作も尠からず、間代性及強直性筋攣攣とて一定の前兆ありて患者は急に卒倒或は強直又は彎曲狀態を呈し、知覺錯迷意識朦朧なる俗に之を(癡)と云ふ、發作時は大抵十五分乃至三十分にて鎮定するもカタブレシアとて屈曲し得べき關節の強直或は昏睡を催すことあり亦種々の麻痺を起し、且つ震顫狀態の歇まざるもあり、猶言語障害とて無聲又は眞の啞と爲ることあり、小兒に在りては仰臥動作自由なるも



歩行直立なし得ざることあり、要するに自覺せる隨意の運動のみは痲痺せられて不能なるも不隨意の運動又は感情より出たる動作は妨げらるゝことなし(四)内臓器能障害をも發す、即ち、食慾不進、嘔吐、腸中瓦斯蓄積、吞酸、嘈雜、腹痛、排尿頻繁、及癲癇様發作等にして心機亢進、月經時の疼痛、其他ホステリ性咳嗽を發す。

【療法】 本病に對しては患者の主訴を標準とし、次で前述せる症候を總括的に思念し、最後に本病の全治を思念し施術するを以て最も適當なる順序とす。

#### 脚 氣

【原因】 未詳なり、米食中毒説、青魚有毒説、或は固有の細菌に因るものとし、或は營養の障害即ち食物中含窒素物と含炭素物の配合不適當なるに依るものとする説あれども、要するに一種の傳染病と見做すを得べし。

【症候】 大凡三種に區分すべし、即ち乾性脚氣、濕性脚性、(水腫症) 及急性脚氣(衝心性)是なり。乾性症に在りては初め脚部、及び下腿に知覺異常を發し、次で上腿下腹、口唇にも漸次同症狀を來す、然して腓腸部に緊張壓痛あり、膝

蓋腱反射概ね消失し、漸次歩行困難を來し、心悸亢進脈搏頻數を伴ふものごと(慢性症)に在りては、前記徵候に兼ねるに脚部より全身の皮下及び漿液膜腔に水腫を發する者にして、患者は著るしく呼吸切迫、心窩苦悶を訴へ、利尿は減少し、便通は秘結す、衝心性に在りては心悸亢進等の諸症急劇に増進し、脈搏頻數、皮膚蒼白色を呈し、呼吸困難、苦悶悪心嘔吐等を發して死に到る者也。

【療法】 本病を治療するに當りては先づ其症狀の濕性症なるか、急性症なるかを觀察し、急性症に在りては衝心等の危険症候を呈することあるを以て、醫師に非る術者は極めて周到なる注意を要する者とす、濕性症に在りては先づ便通利尿等の旺盛となる事を思念し、随つて下腿の浮腫及び知覺異常、又は呼吸困難、心悸症進等の全治を思念し施術すべし、然れども浮腫の如きは便通利尿の不整に起因する症狀なるを以て、一定の經過例へば二時間或は三時間の後に於て漸次減退する者故に以て、術者は其意を了して施術することとす、又乾性脚氣、即ち急激に來る悪性症と雖も其病態の程度に依りて一二回の施術にして奏効することあるも、醫師の立會を求むる必要を認むる場合なきにしも非ずそ



は萬一不幸にして施術後直ちに不測の轉歸を執るが如きことありとせば術者の迷惑此上もなき事なれば宜しく慎重の注意を要す。

尙術者は患者の脈搏、呼吸等を窺ひて豫じめ其輕重を察知し得る様練すれば最も妙なり。

#### 胃 加 答 兒

【原因】 過度の飲食、不消化物、刺戟性食餌、寒熱其度に過ぎたる飲食物等の攝取より來り、或は魚菌の中毒、又は急性熱病の前驅として來ることあり、腸加答兒の波及又は胃部、或は全身の冷却に因することもある、猶貧血者、衰弱人體に於て本病を發することあり。

【症候】 食氣缺乏して口渴を訴ふ、悪心、嘔吐、嘈雜は本症の主なる徵候にして猶胃部の痞滿、嫌食、吞酸、暖氣、胃痛等を起すことあり、其重症なるものに在りては以上の徵候の外に、熱發、不眠、譫語、疲勞、倦怠、頭重、尿渣、便秘等を來し、舌は強度に被苔して、患者は糊様の味覺を訴へ、又腸加答兒を兼ねる時は下劑を發す。

#### 慢性胃加答兒

【原因】 飲食物攝取法の不良、飲酒、喫煙、或は口腔の不潔等より起るものあり、急性胃加答兒の不治、若くば再發、又は咀嚼不足、胃の經久刺戟等よりも起り、心臟、肝臟、肺臟等の疾患に關する胃の鬱血及び、胃潰瘍或は胃癌、貧血、萎黃病、微毒、結核等の原因によつて起ることあり。

【症候】 本病は急性胃加答兒と症狀略相似たるも、經過の緩漫なるを以て特性とす、食思缺乏若くば善飢症を發し、暖氣、嘈雜、吃逆、食後の悪心、吞酸、便秘、舌苔等の症狀を起す、酒客にありては朝時嘔吐を起し、唾液狀物質を吐出し、胃部膨滿して、之を壓する時は疼痛を覺ゆ、而して患者の營養は侵害せられ、顔面蒼白となり、皮膚は枯瘦し、筋肉は瘦削し、皮下脂肪組織は大に減退す。

【療法】 急性症に在りては醫療に加用するを可とする場合多く、慢性症に在りては食物の注意を態るの要あるは言ふ迄もなく、且つ其食物を消化せしむるに必要な消化液の分泌を促し、胃の運動及び胃液の分泌の旺盛になる様思念し



施術すべし。

腦 貧 血

【原因】 急性は多量の出血、精神激動より發し、慢性は營養不良、授乳經久、常習下痢等より誘發す。

【症候】 皮膚蒼白色を呈し、頭痛、耳鳴、心悸亢進、心窩苦悶、瞳孔狹小、眼火閃發、冷汗重聽を催し、眩暈失神を生ずるは急性徵候にして、多くは醒覺すれども時には知覺を恢復せざるもあり、之を神經性卒中と稱す。慢性に於ては同一徵候の外に視力減退し、稀に幻覺等を起すも、直に失神卒倒する事は稀なり、只急に起坐したる時、長時の上圍等に卒倒する事あり。

附記 類似腦水腫は小兒急性腸加答兒に罹りて劇しく下痢したる時に本病を誘起す、最初は刺激性症候、即ち顔面潮紅、眼球射光、直視、不眠、譫妄等を發し、後痲痺期に入り、四肢厥冷、項部強直、昏迷、反應遲鈍となりて斃る。

【療法】 本病患者には先づ消化機の健全に復する事を思念して、營養佳良なる

ることを前提とし、次で常に精神の激動等の無く沈靜せしむ可く思念し施術すべし、然れば漸次恢復するを以て、遂に失神卒倒するが如き事なき様重ねて思念し施術するを要す。

神 經 痛

【原因】 神經痛は神經の疾患にして、其主たる徵候は疼痛なり、而して神經性の稟賦は其素因と爲る、其發するは小兒時に稀にして春期發動期より五十歳迄の間に最も多しとす、蓋し生殖器機能發動期中は大なる影響を爲すものにして婦人は(坐骨神經を除く)他)男子より多し、貧血を合併する諸疾患、殊に萎黃病、肺癆、神經衰弱は皆該症の素因となる飲酒及び喫煙の過度も亦然り、又之を誘起するものは即ち感冒、傳染病殊に麻拉利亞、稀には窒扶斯、微毒、水銀銅、鉛等の中毒、生殖器の刺戟、其他腫瘤(動脈瘤)外傷、骨膜炎等概ね神經幹を壓迫すべき疾患、即ち下眼窩神經の其走行中に壓迫を受けて神經痛を起すが如く極めて稀には一定部の過劇なる使役によりて之を發するに在り、又本症は他症例へば脊髓病にして其後根を刺戟する症ヒステリー、ヒポコンテリーの一症



候なることあり。

【症候】 一神経幹の走行に沿ふて其末梢に至る、卒然猛劇なる疼痛の發作（運動、壓迫、寒冷、精神感動等は往々之れを喚起す）を呈す、而して其強弱の度は瞬間に變換し、且つ他の近傍神経及び他側の同名神経に向て此疼痛を放散す隨て知覺過敏なる、又運動神経の刺戟症狀即ち震顫痙攣を起し、運動困難を爲り、尋で脈管運動神経、及分泌神経の障害（皮膚は蒼白を呈し、且つ厥冷し或は紅色温暖となり、而して其部の腺分泌を増進すること往々あり）を來すも且つて全身症狀を發することなし、神経の走行に沿ふて數箇の所謂痛點なるもの存し、或は全く之を缺如し或は之を微知せざること有り、通例此發作は若干分時乃至數時間稽留するものなり、其新發症にありては疼痛過敏、舊症にありては知覺鈍麻を呈することあり、而して此病荏苒久する者にありては往々食慾缺如、情意鬱抑等を發起す。

【療法】 本症には三叉神経痛、偏頭痛、頸後頭神経痛、膊叢神経痛、横隔膜神経痛、肋間神経痛、乳房神経痛、腰神経痛、坐骨神経痛、等の症別あるも鑑別

は甚だ困難ならず、其治療に着手するに當り疼痛消散を思念し本院の術式によりて施術す、本症の奏効は殊に顯著なるものあり。

### 神經麻痺

【原因】 顔面神経麻痺にありては中樞性は「レンス」核出血、前中央迂曲の障害其他脳脚及び顔面神経核の損害、延髓球麻痺、狂人進行性麻痺、微毒等に因り周圍性は腦底の腫瘤、骨瘤、骨傷、骨膜炎大抵他の腦神経障害を合併す、神経徑路中に於ける障害或は頸部の障害乃ち淋巴腺腫、耳下腺炎或は分娩時の外傷に基因し、或は感冒に於ける全く末梢性なることあり。

三叉神経運動麻痺は極めて稀有に屬し多くは腦底の腫瘤の一症候に過ぎず。舌下神経麻痺は多く中樞の原因にして、唯一症候なり、例之延髓球麻痺、狂人性麻痺、偏癱に於て見るが如し。

鋸筋麻痺は外傷若ば腫瘤の壓迫に由る亦常に肩胛上重荷を負擔する者に發す。

【症候】 原因の中樞性、周圍性に由りて自ら差異あり、而して中樞の麻痺に於ては大抵口圍及び鼻部のみに限局し、周圍性にありては全神経に延及す、全



顔面神経麻痺の確徴は患側の口角下垂し、爲めに吹嘘すること能はず、又口笛及び唇音を發する能はず、口を閉て頬觀を嘘張する能はず、閉目する能はず、額部に皺襞を作る能はず、鼻唇溝消失す、而して莖狀乳頭孔より下部の所患なる時は以上の諸症候なるも上部に至るに従つて唾液分泌及び味覺障害、聽覺過敏等起し、若し味覺障害なくして爾他の諸症候を顯すものは、其所患膝狀神經節の上部にあるものとす、又患側の攣縮、纖維性搐搦若くば共同運動を起すことあり。

末梢性兩側顔面神経麻痺は兩側岩狀骨の腐骨疽に於て之れを見る、中樞性兩側麻痺は例之延髓球麻痺に於て見ることあり。

鋸筋麻痺にありては長胸廓神経の分佈する前大鋸筋の侵襲せらるゝ者にして其狀たるや肩胛骨は擧上せらる、其上角は外方に傾き下角は内方に傾き、而して全内縁は翼狀を呈し、手は地平線を超へて高擧する能はず。

【療法】 麻痺消散すること強く思念し、正式に施術すべし、本症の周圍性に於ける者は三四回若くば六七回の施術によりて治癒す、殊に發症期の者にあり

ては一回の施術よく全癒する事あり、然れ共奏効不良の者も無しとせず。

#### 神経性心悸亢進

【原因】 神経衰弱症、ヒステリー、ヒポコンデル、悪液質、失血過多、萎黃病貧血、手淫、過房、刺激性飲料の濫用等より發し、又生殖器疾患、痔疾、腸蟲より反射的に起ることあり。

【症候】 患者は胸部に苦悶を訴へ心悸亢進、心動不整、眩暈失神を來し、耳鳴及び顔色潮紅或は蒼白を呈し、心臟肥大す。

【療法】 本病の如きは、單に神経性心悸亢進の全治を思念して施術するも可なり、然れども本症は神経衰弱症ヒステリー、ヒポコレタル症等に併發する者多きを以て、術者は其原因症を察知し、其原因を全治せしむると同時に本症候は全く治癒する者とす。然れども唯單に心悸亢進症のみを呈する時は心臟の鼓動の全癒せんことを思念し施術すべし、尙ほ本病の施術に最も注意を要するは、心臟の鼓動等烈しき場合は念聲を極めて低聲にすることを忘るべからず。

腸 加 答 兒 附 急性腸加答兒



【原因】 急性に在りては暴飲暴食、不良なる飲食物中毒、腹部の冷却、粘膜刺激の藥物、氣候の不順、峻下劑の亂用等に依て發し、急性胃加答兒を合併し急性腸加答兒を爲す、其他腹膜炎の波及、蛔蟲の刺激、敗血性疾患、窒扶斯、赤痢等の如き傳染病の一分症候として來り、或は内臓の疾患に伴ふ時もあり、皮膚の大火傷に因て發する事もあり、小兒は尤も本症に罹り易し。慢性に在りては急性腸加答兒の反覆に依りて發し、又は肝心、肺臟等の門脈系鬱結症、小兒の食餌不攝生、痔疾結核、腸寄生蟲、飲酒過度等に起因することあり。

【症候】 大人に在りては腹痛(持續性又は便通時の前後)雷鳴下痢(稀薄液狀淡黄色にして多量の上皮、粘液、消化せざる食物を含有す、酸性反應を呈す)鼓脹及尿量減少を來し頭痛を伴ふ、發熱は少きを常とす。雖も稀には高熱を伴ふあり、急性胃加答兒を合併せる時は嘔吐を發し、直腸部を侵す時は裏急後重を呈す、慢性に在りては便秘と下痢との不定の變換、下腹壓重、痞滿、風氣、神身違和、甚だしき衰弱を來す。

【療法】 急性症に在りては醫療に併用するを可とし。慢性症に在りては胃の機

能を旺盛に胃液の分泌を促がし、食物をして能く消化し盡し、極めて腸の負擔を輕からしむる様思念し、次で腸の加答兒の治癒を思念し、従つて下痢又は便秘等なく、適度の便通ある様思念し施術すべし、されば漸次其症候を減じ遂には全治する者とす。

### 儂 麻 質 斯

#### ▲急性關節儂麻質斯

【原因】 本症の原因を往時に在りては、寒冒に起因するものと看做されたれども、今日に於ては之を傳染病に算入せらるゝに至れり、病源未だ發見せられず。雖も、一種の細菌によりて關節に急性疼痛的腫張を來す疾病なり、故に關節滲出物中には、醗膿性鏈鎖狀球菌及び葡萄狀球菌を證明し得らるゝに至れり、本症の誘因としては、寒冒、外傷及び家屋の不衛生的居住、一定の職業等にして、一度本症を患ふる時は、反つて感受性を増すものなり、又痲疾、猩紅熱、丹毒、敗血膿毒症、腸窒扶斯、赤痢、肺炎、再歸熱、腦脊髓膜炎等に於て、關節炎を來すことあり、之を類儂麻質斯性疾患と謂ふ。



【症候】 由來本症を發するものは、十四歳より四十歳の間在りて女子よりも男子に多く、其潜伏期は未だ確定せられざるも、數時間に過ぎざるもの、如し其發病は俄然として來るあり、或は軽度の四肢及び、關節疼痛、輕熱等を以て或は安魏那、咽喉加答兒等の前驅症の下に、惡寒戰慄及び關節の劇痛を來す、關節は疼痛、腫張及び發赤を呈し、之に觸るゝ時は熱く、且つ疼痛を増す。大關節には屢々波動を認む。關節中冒され易きは、膝關節、肘關節、肩胛關節なりとす、而して疼痛及び腫張は好んで諸關節に遊走するなり、是れ本症に特有なる點なりとす。熱候は不定型にして三十九度乃至四十度に昇る、而もそが一二週間を持續するなり、精神は概ね清朗にして、脈搏は頻數となる、舌は多少の被苔を有して振顫す、食氣衰へ、口渴を増す。往々下痢を伴ひ。脾臟腫大し、心臟には雜音を呈す。本症の併發症中注意を要するは、急性内膜炎にして、多くは僧帽辨膜を侵す、特に注意すべきは、腦脊髓癱瘓質斯（一名過熱性關節癱瘓質斯）にして、四十度乃至四十一度の高熱を來し、昏瞢に陥り致死的轉歸を執るに至る。

#### ▲慢性關節癱瘓質斯

【原因】 本症は急性癱瘓質斯に續發し、又は感冒、濕潤、非衛生的家屋の居住等より來りて、其輕症なるものを慢性關節癱瘓質斯と謂ひ重症なるものを畸形性關節炎と謂ふ、又本症は高齢者に多く、殊に女子を冒し易し。

【症候】 本症は多くは無熱に經過すれども、時として、一時性の熱發を來すことあり、甚だしき徵候は關節痛にして、其疼痛は自發し、或は壓迫に由りて發し、或は他動的、若くは自動的運動に由りて發す、而して疼痛の末消に放散することあり、或は神經痛様を呈することあり、後に至りては、疼痛はたゞ運動時のみに發し、安靜時には疼痛なきことあり、關節は腫張し、漸次關節の變形又は強直を呈す、通常侵さるゝは足、膝、肩胛、肘、腕關節等にして、趾指も亦屢々侵さるゝなり、關節の變化は數月或は數年若くは終生に亙ることあり而して屢々其症候に消長を來す、即ち氣候の變換時に症候を増す、故に多數の患者は患部の疼痛の増減によりて天候を占するに至る。

畸形性關節炎は、貧人に多きが故に、貧人關節炎の稱あり、前記原因の外本



症は比斯的里に由りて發することあり。

#### ▲筋肉痲質斯

【原因】 本症は一種の傳染病たること疑ひなからん、從來其原因なりとせられたる寒冒は蓋し一誘因と見るを得べし、他の傳染病の如く、同時に多數の患者を生ずること稀ならず、特に氣候の變換し易き春秋の時季に於て流行性に蔓延することあり、天候に關係あること猶慢性痲質斯の如し。

【症候】 由來本症には急性と慢性とあり、又所患の局部によりて名稱を異にするを以て左に區分して、其症候を掲げん。

(甲)急性筋肉痲質斯、本症の主徴は、筋肉痛にして、或は自發し、或は壓迫によりて誘發す、其疼痛は一筋に限局し、筋肉腫張す、通常無熱に經過するも稀には微熱を發することあり、筋肉の運動大に障礙せらる。

(一)頸筋痲質斯、頂部及び頸側に疼痛あり、頭部は傾斜し、後頭は患側に傾き願は健側に向ふ。

(二)腰痛、本性は急性筋肉痲質斯中最も多きものにして、薦骨及び腰部甚

だ過敏となり、軀幹を屈曲又は回轉する場合に甚だしき疼痛を發す、此種の疼痛は外傷に因すること多し。

(三)胸筋痲質斯、胸筋、殊に助間筋に於て、呼吸、咳嗽、嘔嚏等の時疼痛を發す。

(四)痲質斯性背痛(痲痺)背部及び肩胛部、殊に三角筋に疼痛を發す。

(乙)慢性筋肉痲質斯、本症には他覺的の變化を認めず、疼痛の一局部に固着すること稀にして、屢々各部に遊走するなり、殊に本症の氣候に關係あるは非常にして、運動の障礙は僅微なり、而して徴候の自覺的なるを以て、詐病と區別すること困難なり。

【療法】 本病は前記各項に分類したる如く其原因及び徴候を異にする病症多しと雖も、其特徴に到りては蓋し、悉く局部の炎症と俱に疼痛を伴ふ者に非るはなし、故に先づ本病の全治の思念を前提として、發熱及び局部の疼痛の減退せることを主として施術すべし。

尙ほ本病の爲に併發したる病症ある時は、是が臨機應變の思念施術を要するは



言ふ迄もなきことゝす。而して催眠術療法として本病の豫後に現はる、筋肉の強直に依る、關節部の屈伸不隨等を治療せむことして、手術を求むる場合尠からず、斯の如き際に在りては術者は雙手を添えて、被術者の患部の強直状態を屈伸せしむる方法を講ぜざるべからず、其場合に於ては豫め痛苦を除去すべく施術を屢々重ね、以て漸次筋肉の伸縮を促がすべし。

## 痔 疾

【原因】 本病は、痔靜膜の結節狀に擴張せるものにして、便秘、攝護腺腫大、直腸癌子宮腫瘍、妊娠、及び慢性心臟及び呼吸器の疾患に於て發し、又重荷を持つ者、坐食するものは、往々本病の原因をなす、而して三十歳より五十歳の年齢に多く、また男子は女子よりも本病に罹るもの多し。

【症候】 患者は運動又は便秘時に當り、肛門に不快なる緊張、及び疼痛を發す、又擴張せる痔靜脈は破裂して所謂痔血を起す、而して此の出血に先だつて、一種特有の症候を以てすること往々之あり、痔疾性苦腦症即ち是なり、患者は頭部充血、頭痛、眩暈、心悸亢進、呼吸促進、肛門に於ける癢痒及び緊滿の感を

訴へ、又該部に搏動を起す。

内痔は時として外方に脱出し、肛門括約筋に由り密箝せらるゝを以て、患者は爲に、肛門部に當り劇甚なる疼痛を發し、顔貌恐怖の狀を來し、前額に出汗を蒙り、強度なる苦悶に悩まざる、之を名けて痔核箝頓症と云ふ、又外痔は肛門に裂創を來し、排便の時、或は他の努責作用によつて劇痛を増す。

【療法】 本病患者にして便秘の習慣ある者に對しては素より、然らざる者と雖も、先づ胃腸に於ける消化機能の旺盛なるを思念し、次で便秘の習慣を變じて軟便の排泄容易となり、同時に患部の疼痛を除去すべく思念して施術を行ふべし、然れば局部の刺激を除き随つて肛門の龜裂等を發せざるべく、漸次快方を見るに至るべし、尙術者は主として患者の疼痛除去を深く思念するを要す、其他患者に毎便後微温湯に食鹽を入れ、肛門の洗滌を勤むる時は一層其効果の顯著なるを見るべし。

## 癩 痢

【原因】 本症の起因は種々ありと雖も、多くは遺傳性疾患として現はるゝ事多



し、其主因を擧ぐれば腦脊髓の疾患、父祖の遺傳、心身過勞、過激なる勞働、絶大なる恐怖、手淫過多、房事過度、神經癒着部癥痕の刺衝機旺盛、梅毒、鉛中毒、腺病等にして往々腸蟲發生、極端なる便秘、異例の暴飲、月經の來潮時に發する事あり、其眞因は未だ確定せられずとも、一種の神經的疾患に歸する事を得べし。純性癲癇と偶發性とありて壯年者に多し。

【症候】 病狀は間歇的に一定時を隔て、發作す症候は種々ありて、通常發作前に知覺の異常を來し、動悸發汗し、五官に障害あり、心神興奮する事胸膈しき事、眩暈杯種々の兆候ありて、急に全身痙攣の襲ふ所となる。故に患者は俄然卒倒し、人事不省に陥りて身體硬直に變じ、頓て痙攣を示す、顔色は青色又は暗赤色に變じ、瞳孔散大したる儘收縮せず、口内泡沫を吐き、往々放尿又は遺精する事あり、次いで數分時の後卒倒の儘昏睡状態に陥る者多し、回復時期は數時間乃至數日間を要する事あり、中には痙攣を起さず、眩暈或は氣絶の状態に在りて、一時的知覺を失ふ事あり、或は突然執務を抛棄して意外の場所を彷徨する如き者あり、外に精神上の障害を起す者にして發作的白痴と爲り、裸體

にて亂舞し、偷盜、放火の罪を犯して我に返り、自己の所業を驚愕する者あり是を癲癇性癡狂と名く、以上の發作は數日、數週、又は數年を隔て、反復する者なれども、甚だしきは發作の續發迅速にして患者は絶えず人事不省の状態に在るを常住癲癇と稱す。

【療法】 本病に對しては其發作せざる時に於て再び發作せざる様思念するを第一要義とするも、其病因に至りては遺傳性の者と後天性の者と有るを以て、後者の如き原因より來れる者に對しては、極力其原因の除去を思念すべし、例へば中毒症若しくは腸蟲發生又は極端なる便秘の習慣ある者に對しては其原因全治を思念し、次で癲癇の發作を止むるべく思念し施術すべし、而して本病は如何なる醫學大家と雖も其發作的以外に診斷して其全治したるや否やを知るに困難なる者なれば、況んや素人に於ては發作時日の遠ざかりしを以て最早全治したる者と速斷してはならぬ、故に全治せりと認めたる後と雖も尙施術を繼續し置くの必要あり。

## 遺 尿 症



【原因】 不良なる教育、夜間過度の飲料、温褥、精神發育の不良、腦脊髓の疾患、膀胱結石、腎孟炎、包莖腸寄生虫の刺戟、手淫、神經の疾患等より來るもの多し。

【症候】 通例三歳より十四歳迄の小兒に發する疾病にして、稀には春機發動期に及ぶことあり、夜間熟眠中に尿を漏す、殊に就眠後二時間内外に漏すこと多し、又は早曉に漏すことあるも、夜半に漏すことは稀なり、患者は往々放尿に關する夢を見つ、排尿するものを夜間遺尿症と謂ひ、又晝間に於ても腹部の努責によりて放尿することあり、之を晝間遺尿症と謂ふ。

【療法】 遺尿症とは俗に寢小便と稱する疾患にして、余の經驗に依るに感應最も良好にして普通一二回の施術にして其目的を達する場合多し、然れども或る場合に於ては數日又は十日以内にして再び遺尿することあり、是れ其原因の如何を觀察する能力なき術者の罪にして、完全に治療する時は最も卓効を奏する者こそす、即ち不良なる教育、夜間過度の飲料、温褥精神發育の不良、手淫等より來る者に對しては、施術すると同時に各項に應じそれ〴〵注意し、膀胱結石

腎孟炎、腦脊髓等の疾患より來る者に對しては、適當の處置を施し、而して就眠中如何に熟睡するも、漏尿の憂なき事を充分患者に自信せしめ、或は尿意を催す時は夜中必ず覺醒すべき事を告ぐべし、斯の如くにして一回にして其功を奏するも數回施術を爲せば自ら其習慣を馴致するを以て遂に全治の功を奏するものこそす、猶本病は催眠術にても奏功す。

### 喘 息

【原因】 本病の主因は猶不明なれども、恐らくは呼吸中樞の病變に因ものなるべしとは、現時醫學界の説なり、鼻腔、喉頭氣管支病に罹れる者は、本病を發し易く、濕疹、痒疹、蕁麻疹、等の皮膚病を有する者にも本病を發することあり、氣候及び氣象も亦本病に影響あり、冬期及び夏期に發し易く、又香氣の吸入に依りて特發する有り、或は枯草、「ランプ」の煤煙、家畜、芳香植物等の臭氣を嗅ぎて本病を發することあり、反射性喘息は鼻腔の疾病に依りて發すこと最も多く、耳、胃腸、子宮等の疾患又は妊娠中に發することあり。

【症候】 本病の主張は呼吸困難にして之に固有なる分泌と、急性の肺膨脹を伴



ふ者なり、稀には發作に先ちて前驅症を現すことあり、發作時は突如として來り、深更熟眠中、俄に胸内苦悶、呼吸困難の感を以て醒覺し、胸廓狹隘の感、及絞窄の感を覺え、患者は僅に跪坐呼吸を營むに到る、皮膚及び粘膜蒼青色を呈し、苦悶の爲冷汗を流し、尤も呼氣の困難を感ず、是れ本症固有の特徴とす故に呼氣は吸氣よりも長く腹筋は強く收縮して著るしく緊縮するを常とす。而して喘息の發作間は通常咳嗽、咯痰なきも發作の終りに近づく時は輕微の咳嗽によりて灰白色の粘稠痰少量を咯出するなり、此の咯痰中に喘息螺旋體と稱する者を含有す。

【療法】 本症發作の原因は種々ありと雖も就中精神作用の關係あることは又顯著なる實證にして、本療法は常に之れが影響を除くるに努めざるべからず、即ち術者は該病の全治し、最早再び發作の憂ひ等寸毫も無き様思念し施術するを以て主眼とすべし、而して患者が毎に發作の原因なりと思惟し居る氣候の寒冷不良なる食物の攝收後の如き恐怖せることを強て實行せしめ、同時に施術して發作なからしめたる時は最早術者自身も既に安心せるを以て屢々反復する時は

遂に全治するものとす。

附記 本病患者中には其苦痛を免がれんとして往々モルヒネ又はヘロイン等の中毒症に罹り居るものあり、爲に折角喘息の發作去るも中毒に悩み、中毒治すれば喘息起る等の例尠ならず戒むべし。

齒 痛

【原因】 齒牙及び其附近の疾患は多少局限せる疼痛を起す者にして、其種類性質、痛度、等何れも其原因に依りて同じからず、而して齒痛の原因を爲す者概ね左の如し。

齒髓炎、齒髓新生物、牙質知覺過敏、齒膜炎、齒槽膿漏、白亞質肥大、齒根吸収、咬合不全、埋没齒、生齒困難、齒牙の勞働過度等なり。

【症候】 疼痛の状態及び痛度は其原因に依りて同じからざるものとす。

【療法】 本症の疼痛は其原因種々ありと雖も、概ね器質的障害より來るものにして、其原因を根治せしむるに非ずんば到底治癒する者にあらざるかの觀あるも事實は然らざること多し、即ち疼痛なるものは其局部に分布せる神經の痛み



にして、種々の刺激を之に及ばすが爲に來る者なれば、先づ其疼痛の鎮靜する  
 ことを思念し、施術せば隨つて周圍の炎症は去り、遂に全治する場合多し、然れ  
 ども其器質の障害の程度及其状態の如何によりて自然に治癒するものこ、漸次  
 病勢の増進するものこあるを以て、外科的手術に俟たざるべからざる場合ある  
 は論を俟たず。

#### 半身不隨

【原因】 腦動脈に紡錘狀或は囊狀の粟粒動脈瘤を形成せるより發す、該動脈瘤  
 は非常なる精神の興奮、便通時の努力、暴飲、身體の劇動、熱浴等の誘因に依  
 りて破裂す、卒中是也、患者は四十年以上を多しこし通常遺傳素因を有す、四  
 十歳以下の者にして發するは概ね梅毒に起因するこ多し、其他窒扶斯、武氏  
 病、白血病壞血病の如きも稀に本病を發するこあり。

【症候】 發病は大抵突然(稀に頭痛眩暈等を前驅するこあり)卒倒、人事不省  
 脈搏遲鈍、呼吸緩漫、顔面歪斜、開口流涎、半身の運動、知覺痺癱等の諸症を  
 頓發す、而して人事不省は昏睡の状態より不良の轉歸を執り、或は覺醒して局

所病症を遺す、其局處症は出血の部位との關係に依り、種々の相違を呈するを  
 以て今一々説明するの煩を避く、而して經過佳良なれば遅くも二十四時間以内  
 に覺醒し、半身の痲痺を呈し又言語の障碍、精神の抑鬱、痲痺の攣縮等を發す  
 【療法】 輕症のものにして發作後速かに施術する時は一回又は二三回にして佳  
 良の成績を擧ぐるこ多し、又發病後一ヶ年以上を經過せる者こ雖も好結果を  
 得るこあり、然れども多く六十歳以上は比較的不良にして、營養佳良なる者  
 及び壯年者尤も良好也。

本症は原因に鑑みるも溢出したる血液の壓迫を避けざる以上は、生理的に復  
 するの理なきが如き感なきに非ずこ雖も、施術充分感應する時は知覺及び運動  
 の異常を回復し、併せて其各所の症候を消失するものこす。然して施術後術者  
 の兩手を以て患者の頭部を軽く壓迫し、且つ軽く撫で下げつ、同時に精神の沈  
 靜、血行の旺盛、便通の盛なることを思念し、従つて知覺及び運動の生理に復  
 すべく思念し、施術すべし、猶患者の著るしく感動すへき喜怒哀樂を避くるに注  
 意を懈るべからず。



## 肺 結 核

【原因】 本病の原因は結核桿菌の傳染なり、由來家族及子孫に蔓延する所以は結核菌遺傳的傳染に非ずして、其家族は本病に罹り易き素因を有し、而して幼時より患者に接近するの機會多きを以てなり。

【症候】 潜進性にして、最初咳嗽、咯痰、胸痛、運動時に於ける呼吸促迫、羸瘦食氣不振、増進性貧血、全身倦怠、作業嫌忌、脉膊頻數、盜汗等を來し、輕度の發熱を伴へども、俄然咯血を以て起發することなきにしもあらず、經過は急激に致死するあり、緩漫にして數年間持續する有り、一定せず。其著るしき症候は頑固性の咳嗽膿球血液、結核菌、及弾力性纖維を含める所謂貨幣狀球狀の痰、(往々患部空洞内の血管破裂に因せる鮮紅色の血液の泡沫を混ずることあり) 肺の水泡音、聲音、震顫の強盛、咯血、及胸壁の陷没を來し、鼓濁音、空洞音、鑛性音を發し、盜汗愈々甚だしく、下痢又は食思缺損を憂ひ、肌膚蒼白色に變じ、全身著るしく削衰の状態を呈し、日晡來潮時の高熱を伴ふ者多す。

猶結核が爾餘の臟器に於ける症候及び合併症としては、口腔、喉頭、咽頭に

於ける結核症、乾性及濕性肋膜炎、胃粘膜に於ける結核性潰瘍、腸及び腹膜結核、肝臓に於ける脂肪變性或は澱粉樣變性に陥り、血行器に在りては結核性心包炎を發し、泌尿生殖器に在りては結核の外に腎臓炎澱粉樣腎臟變化を來し、神經系統に在りては結核性腦膜炎となり、皮膚に於ける癩風、浮腫、股靜脈血栓及狼瘡を來すことあり。

【療法】 醫學上に於ては藥物、滋養、空氣、光線等種々あり、雖本療法を併用し、又單獨に行ふて從來多數の全癒者を出せし實驗を有す、本病を施術するに當りては第一に患者の主訴及現症たる咳嗽、胸痛、呼吸困難、不眠、盜汗等の輕快なることを思念し、次に肺の營業の尤も健全に復し肺の主要機能たる吸酸除炭の旺盛に行はる、様強く思念し、施術すべし、之に由つて奏効を現出すを見んか、結核菌を撲滅するに最も必要なるオゾンを肺中に發生せしめ、一面呼吸全體の機能旺盛となり、前記各症狀の如き漸を以て除却し得るは勿論一定の經過を執りて快癒する者なり。

## 吃 語



斯癖は軽く發言し得ざる一種の病氣なり、俗に「どもり」と言ふは言語停滯して容易く發言し得ざるを言ふ、これに二種の區別あり、一は一つづゝの發音及び音の聯結は正しくなし得れども、呼吸筋、發音筋、關節筋の運動不調なるによりて、唯談話のみ途切るゝ者にして、筋肉に變則運動の起らざる限りは平常と異ならず、特に獨居の際に於て然りすとす、他の一は一定の發音一定の語の全く發し得られざるもの、若しくは正しく發し得ざるものなり、前者は遺傳性又は生後の神經衰弱に基く事多く、傳染病頭部打撃、甚だしき驚愕、同癖患者との交際等其原因をなすものにして、此疾病は初め不意に言語の子音長引きて、談話の途切れを生じ、患者の自身にも又他人にも妙に際立ちて聞ゆるより、益々話す毎に行き詰らるゝを恐れ、教師兩親の叱責、交友間の嘲弄に遇ひて漸次悪癖を増長せしむるに至る也、故に謠曲杯謠ふ際には殆んど吃ることなし、是れ母音に長く引く者なるを以て子音も轉じて母音となるを以てなり、後者に在りては器能不關係に因する者もありと雖も、多くは生來の不器用、又は談話の際の不注意より養成するものにして、三歳に至る迄は常人に異ならず、三歳を

超えて初めて同癖を助長す、精神上の言語障害に基く畏怖、積り／＼て助長するを常とす、故に普通人と雖も好んで同患者の發言を摸倣すること久しければ同癖に全く陥るを見ても、其の器能の障害に依らずして、精神状態の不安定に依ることの多きを瞭知するに足るべし。

【療法】 此癖の原因を考ふるに、其多くは幼年時に於て同癖者の言語を摸倣し或は同癖者と交際するに依て發するを常とす、故に咽頭又は聲帶等に障害を來し疾病となりたる者にあらずして、所謂悪習慣の嵩うじて一種の悪癖となりたるものなれば、其療法も到底藥物に俟つべき者に非ざるや論なし。

本患者の常として他人殊に初見の人貴人婦人等の面前に於て勉めて其吃者なることを蔽はむとして、其念頭に吃りて他人に嗤笑せざれざるかの憂慮を爲すが爲に所謂俄に改りたる態度を以て談話を爲すが故に却て虚心平氣を失ひ、遂に一層吃音を發するに至る者とす、上述の如くなるを以て本療法は先づ患者の精神に此の如き不安の念を去らしむると同時に斷じて吃らぬといふ確信を發さしめ、併せて大膽と勇氣を發揮せしむるを本領とし、然して患者の最も困難な



る發音を施術後操練せしめるの要あり、猶催眠術により吃語の全治したることを反覆暗示して効を奏することあり。

#### 飲酒、喫煙癖

飲酒癖喫煙癖は幼年時代には殆んど稀にして、多くは青年時代に於て周圍の感化誘導に依り、又は自己の好奇心よりして悪習慣を養成するに至るものなり。古來より文明の進歩不進歩を問はず、何れの國に於ても酒、煙草を用ひざるはなく殆んど人類自然の要求なるかの如く其人身に及ぼす影響の非常に重大なるにも拘らず、公然用ひて怪まざるも、退いて考ふるに唯何千年來因襲の結果容易に改廢を見るを得ざるものにして、要するに父祖よりの遺傳性として先天的に此悪癖を欲して已まざる者、種々の機會勸誘によりて第二の天性となる者、等相率いて此悪癖を傳播する者にして決して自然の要求に非るや論なし、之を證するに其動機たるや、最初より眞に嗜好する者は稀にして多くは強いて他人を摸倣し、同化する意志より旃めて忍耐して此悪癖を養成したる結果、遂には一種の嗜好を生じて廢する能はざるに至りしのみ、故に一度欲求の念を一掃せ

ば再び最初の状態に立戻りて、此厭ふ可き悪癖を矯正するに至るは理の當然なりとす、猶ほ人ご量に依りては遂に酒精中毒又はニコチン中毒等に犯さるゝ場合あり。

【療法】 此矯正法は本人の希望に依りて行ふは素よりなれども、其意志の薄弱にして、例へば日々一升宛を要する大酒家が、一日に一合に攝することを希望する場合の如き、又二十本の葉巻を三本に攝減せむことを懇願する場合の如く絶対に廢止せむとするに非ざる者に對しては、宜しく謝絶するを可とす、そは前述の如く一の習慣に依りて既に自家の嗜好となり居る者なるが故に、一合を飲めば更に三合五合と其量を増加するの習慣を作る者なるを以て、是等の癖を矯正するには絶対に禁酒禁煙を欲する者に對して施すに非ざれば、何等の効を擧ぐる者に非ざるは論を待たざるなり、故に本人が絶対的、禁止の意志を有するも、自己の克己心を以てしては其誘惑に打勝つ能はざる場合に於て矯正するを常とす、而して其願望と術者に俟つの信仰心との鞏固なる意志あるを認めて初めて施術の功を奏する者とす、然れども人に依りて其目的を達する經過は一



定ならずして、甲は一回にして偉大の効果を収め、乙は五回八回の施術を要して奏効する場合とあるは他の疾病を治療すると同一理なりとす。

斯の如き矯正法は催眠術を施すを可とすることあり、此場合は積極的暗示を與ふるの必要あり、即ち「汝は酒をのむべからず」「汝は煙草を廢せよ」の如き消極的暗示は其効乏しくして「汝は酒を飲む能はず且つ欲せず」或は「汝は酒を厭ふ、其臭氣其味は既に變じて到底口にする能はざる悪臭を放つが故に強いて之を飲まむとすれば嘔吐を催すべし」の如く暗示すべし、更に一層其暗示を強烈ならしめんとせば「汝は之を口にし之を手にしむとするに當りて非常なる恐怖の念を起し、最早や絶對に進んで飲むの意志を有せざるべし」と斷定的暗示を與ふるにありとす。

#### 結 論

本臨床應用編に於ては實地に當りて直ちに治療に着手し、些の困難なからしめんが爲に、平常多く施術者の相遇する疾病の主たるものを選び、原因、症候療法等を悉く精細に列擧し、一目瞭然として其疾患に於ける症狀經過等を知り

得べからしむ、然れ共本編に掲ぐる者は其主たる一部にして、是以外種々なる病者の施術をなさざる可らざる場合あるべし、故に如何な時にも治療をして萬全の者たらしめ精神治療家として一般物質的治療者、即ち醫師其他鍼灸業者と伍して遜色なきを希はむ、進んで特別院生となり研鑽一番是等疾病治療に必要なる生理學解剖等は勿論、病理學、診斷學、及精神病學、心理、哲學等を講究して、新時代に於ける新治療者として完璧なる者たることを期せざる可らず、余は本傳授書を結ぶ最終に於て、特に此の要點を記憶し實行せられんことを望み敢て進言する所以なりとす。



大正五年四月一日印刷  
大正五年四月五日發行  
大正六年十月十日改訂第二版印刷發行

非賣品



著作者兼  
發行者

丸田智昭

京都市上京區新烏丸通竹屋町上ル東橋木町百十八番合地

印刷者

小林庄太郎

京都市下京區醒ヶ井通魚棚上ル佐女牛井町三十二番戸

印刷所

帝國精神學院印刷部

京都市下京區醒ヶ井通魚棚上ル

發行所

京都市新烏丸通竹屋町上ル

帝國精神學院

振替口座大阪三三八二番



終

